

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第144集

野口 II 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

野口 II 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所にあふ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。岩手地区の広域営農団地整備計画に基づく基幹農道整備事業は、農産物流通市場の拡大や農産物取引の規格化、大量化等の情勢に対応する事業として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

岩手地区の広域営農団地農道整備事業に関連する遺跡は、昭和57年以降7遺跡の発掘調査を終了し、6遺跡の発掘調査報告書を刊行しております。本報告の野口Ⅱ遺跡は、西根町北東部の丘陵地に立地し、昭和63年の発掘調査によって若干の縄文時代の遺構と遺物が発見されました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました盛岡地方振興局、岩手北部土地改良事業所、西根町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

- 1 本報告書は、岩手県岩手郡西根町寺田第8地割29-14ほかに所在する野口II遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、岩手地区広域営農団地農道整備事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県農政部農地建設課及び盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は、次のとおりである。
遺跡番号 KE05-0395 遺跡調査略号 NGII-88
- 4 調査面積は3,160㎡である。野外調査は、昭和63年4月8日から6月7日まで実施し、調査資料の整理は昭和64年1月4日から平成元年2月28日まで実施した。
- 5 発掘調査は平井進、中村良一が担当し、室内整理及び報告書の作成は中村良一が担当した。
- 6 遺跡の基準点測量は東日本測量設計株式会社に依託した。
- 7 石質鑑定は佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
- 8 野外調査にあたっては、西根町教育委員会、寺田公民館及び遠藤倉助氏をはじめとする地元の方々の御協力をいただいた。
- 9 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	1	2 室内整理	10
II 遺跡の立地と環境	3	IV 検出された遺構と出土遺物	15
1 位置	3	1 遺構と遺構内出土遺物	15
2 地形	3	2 遺構外の出土遺物	19
3 基本層序	5	V まとめ	36
4 周辺の遺跡	6	1 遺構	36
III 調査方法と室内整理の方法	9	2 遺物	36
1 野外調査	9		

表目次

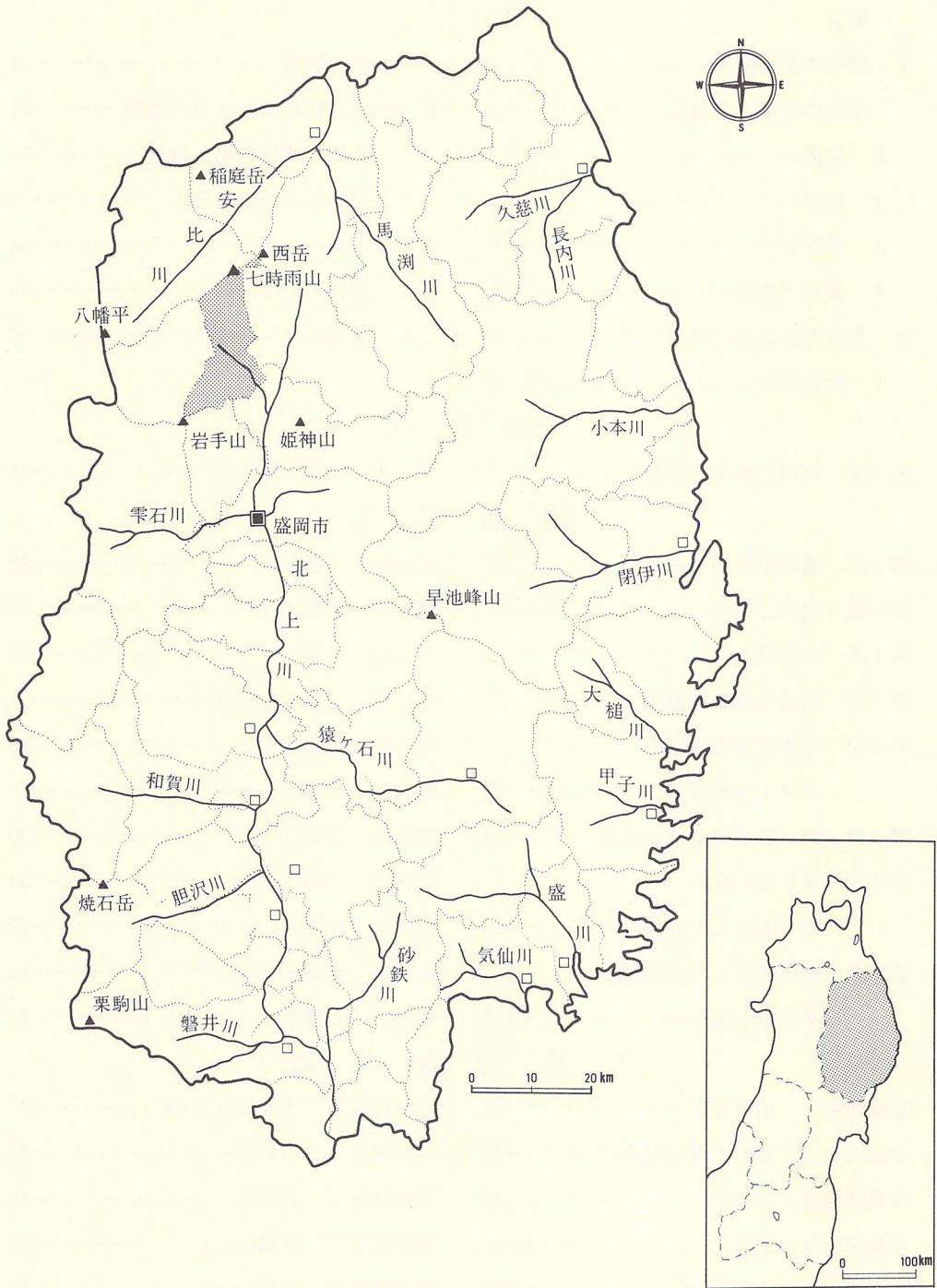
第1表 周辺の遺跡一覧表	8	第2表 石器一覧表	35
--------------	---	-----------	----

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 土器(1)	22
第2図 地形分類図	4	第10図 土器(2)	23
第3図 土層柱状図	5	第11図 土器(3)	24
第4図 周辺の遺跡位置図	7	第12図 土器(4)・古銭	25
第5図 調査区周辺地形図		第13図 石器(1)	28
グリッド配置図	11	第14図 石器(2)	29
第6図 野口II遺跡遺構配置図	13	第15図 石器(3)	30
第7図 IV H03土坑		第16図 石器(4)	31
VII B03陥し穴状遺構	16	第17図 石器(5)	32
第8図 VII C02陥し穴状遺構		第18図 石器(6)	33
V B02石囲炉	18	第19図 石器(7)	34

写真図版目次

写真図版 1 遺跡近景	41	写真図版 7 土器(4)・古銭	47
写真図版 2 基本土層・遺構(1)	42	写真図版 8 石器(1)	48
写真図版 3 遺構(2)	43	写真図版 9 石器(2)	49
写真図版 4 土器(1)	44	写真図版10 石器(3)	50
写真図版 5 土器(2)	45	写真図版11 石器(4)	51
写真図版 6 土器(3)	46		



岩手県全図

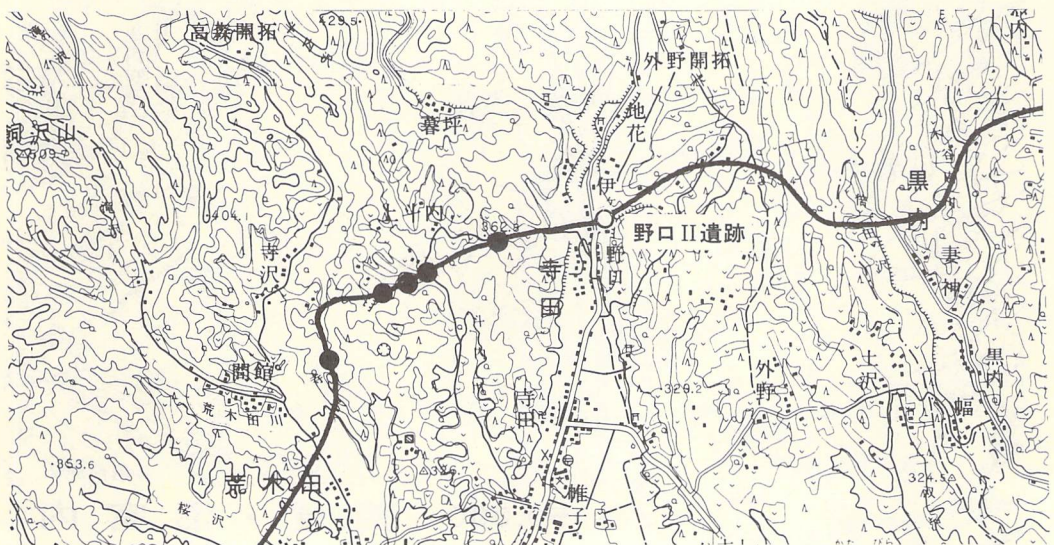
I 調査に至る経過

岩手地区の広域営農団地農道整備事業は、昭和52年に策定された岩手地域広域営農団地整備計画に基づく団地内農道網の骨格となる基幹農道の整備であり、岩手町の国道4号沼宮内バイパスから松尾村の国道282号に至る延長20.04km、幅員8mの農道である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、昭和54年度から県農政部農地開発課と県教育委員会文化課との間で協議された。県教育委員会文化課は昭和55年6月に農道の計画路線に沿った分布調査を実施し、岩手町に25遺跡、西根町に14遺跡、松尾村に4遺跡が確認された。この結果をもとに路線や工法の変更についてさらに両者間で協議が重ねられ、止むを得ず破壊される遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

これにより、昭和57年に西根町の上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、昭和58年に岩手町の黄金堂遺跡、昭和59年には西根町の荒木田Ⅱ遺跡、昭和62年には野口Ⅰ遺跡の発掘調査が実施された。

野口Ⅱ遺跡については、昭和62年8月27日付けの「盛地223号」による岩手北部土地改良事業所長から県教育長あての埋蔵文化財の試掘調査について依頼をうけて、昭和62年9月9日県教育委員会文化課による試掘調査が実施された。調査の結果、縄文土器多数が出土し、遺構の存在する可能性があることから、昭和62年9月16日付け「教文346号」により本調査の必要ある旨回答した。さらに県教育委員会文化課は調整のうえ、野口Ⅱ遺跡の調査を県文化振興事業団埋蔵文化財センターの昭和62年度発掘調査事業に編入し、昭和63年4月1日付け委託契約により調査に着手することになった。



農道と遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

1 位置

野口II遺跡は岩手県岩手郡西根町寺田第8地割29-14ほかに所在する。東日本旅客鉄道花輪線平館駅の北北東約5.5kmに位置し、国道282号線沿いの平館からは県道田代平西根線を5km程北上して野口地区に至り、その北北東0.8kmの町道伊ヶ沢線沿いの丘陵上に立地する。

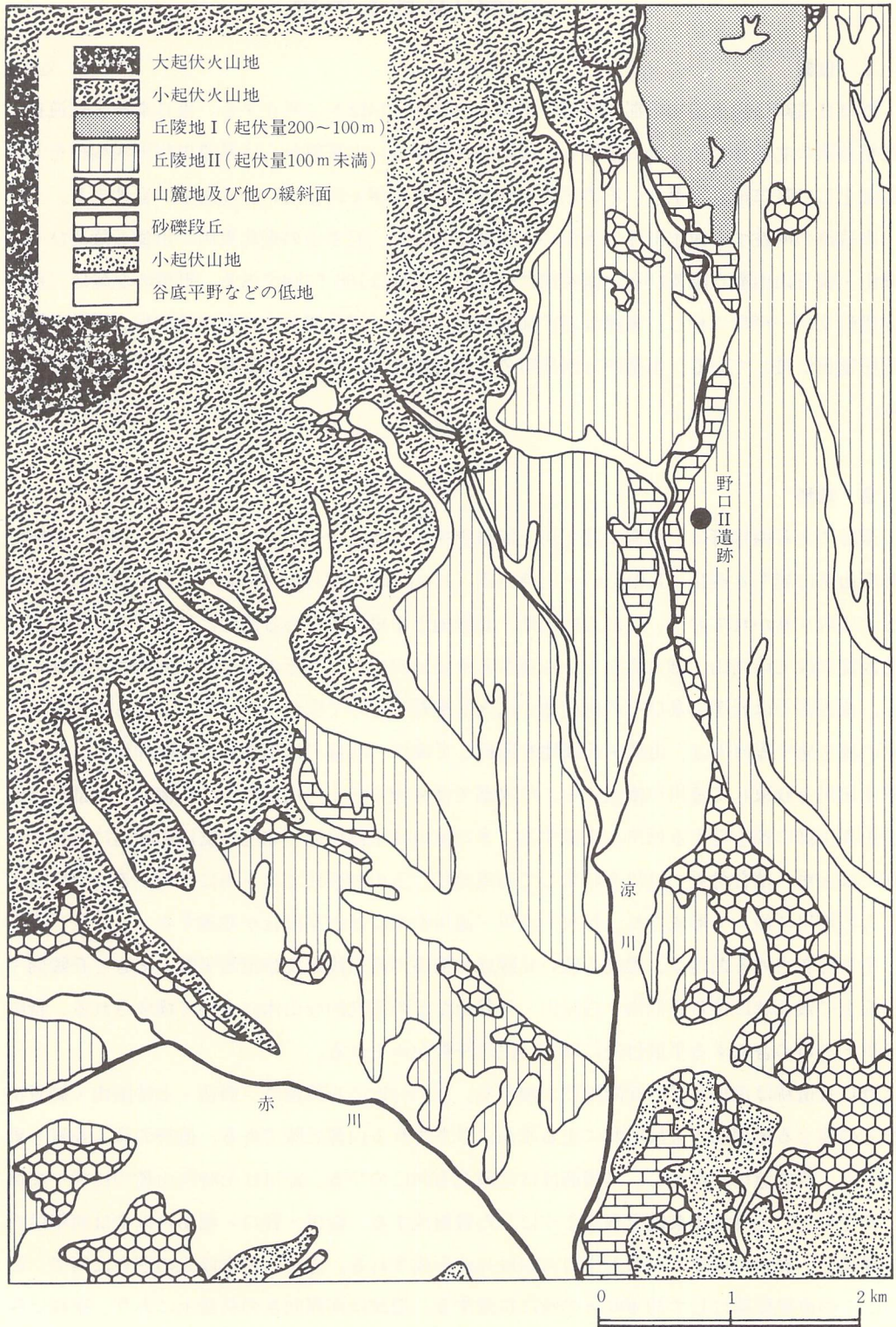
当遺跡の所在する西根町は岩手県の北西部にあたり、岩手山の東北東側の山麓丘陵及び七時雨山・御月山山麓丘陵及びその南東縁に位置し、面積は166.57km²である。町境の北縁は二戸郡安代町及び一戸町に接し、東縁は岩手郡岩手町、南縁は岩手郡玉山村及び滝沢村、西縁は岩手郡松尾村に接している。当遺跡は西根町の北北東端部で、岩手郡岩手町との境界付近に位置する。

2 地形

遺跡のある西根町は、東側に北上川上流域を挟んで北上山系が連なり、北側・西側・南側は奥羽山系に属する西岳(1,018m)・七時雨山(1,060m)・御月山(954m)・岩手山(2,041m)などに取り巻かれており、これらの山地・丘陵地と中央域を占める凹地に位置する。北部及び北西部には七時雨山・御月山などから連なる火山地が広がり、その縁辺に小起伏の丘陵地が続く。南西部では岩手山及びその山麓地が広大な裾野をもって広がっている。これらの山なみにその源を発する河川は、山地・丘陵地を開析して流れ、北部では南東流する暮坪川・斗内川・荒木田川を収束して涼川が南流する。中央部では東流する小河川が赤川に合流し、南部では岩手山火山群に源を発する松川が東流する。また涼川は平館付近で北上川支流の赤川に収束され赤川は大更・落合付近で松川を収束して南東流し、玉山村洪民で北上川に合流する。低地はこれらの河川に沿って形成され、松川・赤川・涼川沿岸には河岸段丘が発達する。

中央部を占める凹地は、標高の低い丘陵地や前述の河岸段丘及び氾濫平野、そして丘陵間・段丘上に残丘状に残る送仙山・白屋山・丹谷山などの孤立的な山体によって構成される。特に涼川と赤川の合流する平館付近には広い氾濫平野がみられる。

野口II遺跡は涼川左岸の丘陵地に立地する。この付近の丘陵地は、西岳・七時雨山・御月山などの連なる尾根筋から放射状に走る水系にきざまれる山麓丘陵である。遺跡の載る丘陵も東に双沢、西に涼川が南流し、尾根筋はほぼ南北方向にのびる。涼川は七時雨山麓の田代平高原に源を発し、七時雨山東麓を巻くようにした後南流する。新田・野口・堀切付近では河岸段丘が発達し、野口付近では左右両岸に河岸段丘が形成される。遺跡は左岸段丘のさらに西で、涼川からの直線距離にして約400mの所に位置する。遺跡は南西向きの斜面上にあり、南縁は西



第2図 地形分類図

流する沢によって限られる。標高は 315 ~ 326 m で、現況は大部分が畑地である。

3 基本層序

右に示した土層柱状図は VI F02区で作成したものである。各層の概略は以下のとおりである。

I層 黒色土 (Hue10YR2/1)。現表土で遺跡全面を覆う。層厚は一定ではなく耕作による土壌移動等で斜面下位ほど厚い。III~V区の斜面上位では10~15cmほどである。畑作による耕作で層上部ほどしまりは弱く、粘性の少ないシルト質土である。明黄褐色~褐色の浮石小粒及び炭化材小片や焼土粒が少量混入し、層下部には砂及び小礫が若干混入する。遺物が若干含まれる。

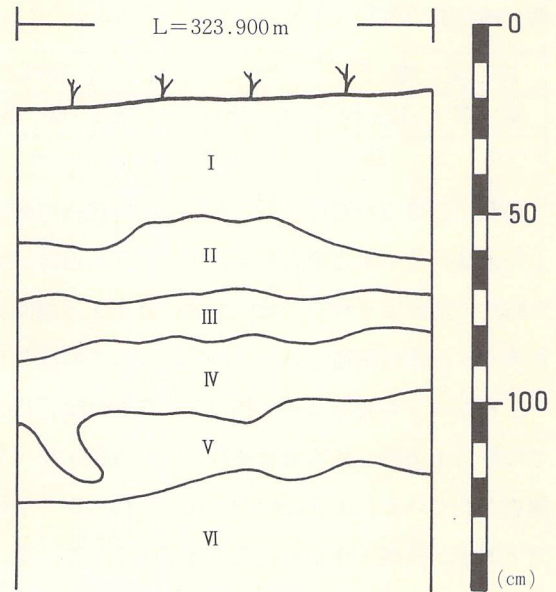
II層 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。しまりが弱く、若干粘性のあるシルト質土である。黄褐色の浮石細粒及び砂が全体に混入する。また小ブロック状の褐色土及び小礫がそれぞれ若干混入する。この層はVI・VII区には全体にみられるが、I~V区の斜面上方では認められない地点もある。

III層 黒色土 (Hue10YR1.7/1)。強くしまる部分としまりの弱い部分があり、均一ではない。若干粘性のあるシルト質土である。II層に近似する黒褐色土がブロック状で混入する。明黄褐色~褐色の浮石粒 (径1~10mm前後) が少量混入する。礫が混在し、遺物が包含される層である。

IV層 暗褐色土 (Hue10YR3/4)。強くしまっており、粘性がある。明黄褐色~褐色の浮石小粒が少量散在し、礫が多量に混入する。

V層 褐色土 (Hue10YR4/6)。強くしまっており、粘性がある。褐色の浮石粒及び小礫が混入する。

VI層 明黄褐色土 (Hue10YR6/6)。強くしまっており、粘性がある。明黄褐色の浮石粒及び小礫が混入する。



第3図 土層柱状図

4 周辺の遺跡

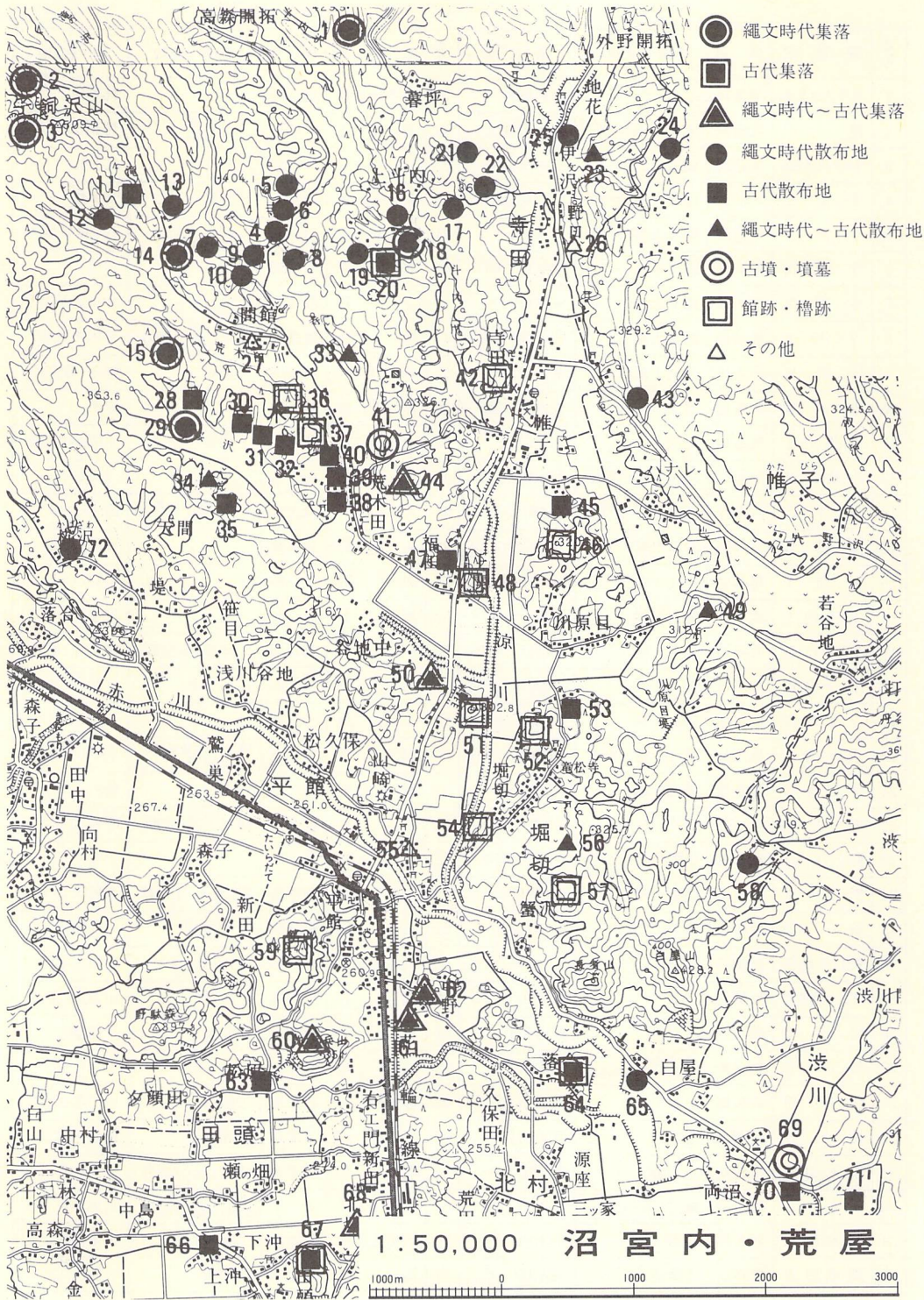
岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳によると、西根町には138箇所の遺跡が登録されている。第4図・第1表には当遺跡を中心とした周辺の72箇所の遺跡を掲載した。掲載した遺跡の時代別・種類別の内訳は下表のとおりである。

縄文時代		古 代		縄文時代～古代		古 墳	館 跡	その他
集 落	散布地	集 落	散布地	集 落	散布地	墳 墓	櫓 跡	
8	19	3	16	6	5	2	10	3

掲載した周辺の遺跡を見ると、縄文時代の遺跡は概して町北西部を中心とした標高300m以上の地域に分布する傾向が見られ、古代の遺跡は涼川支流の荒木田川・桜沢や赤川沿いで、縄文時代の遺跡より標高の低い地域に分布する傾向がみられる。また中世以降の遺跡では城館跡が多く、旧津軽街道沿いで、涼川によって形成された河岸段丘や、丘陵地に多く分布している。

これらのうち発掘調査が行われた遺跡には、1960年草間俊一氏等による谷助平古墳や、近年では野口Ⅰ遺跡、荒木田Ⅱ遺跡、上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡がある。谷助平古墳では2基の古墳が調査されている。1基は径12～13m、他の1基は径6mほどの小円墳で、土師器・須恵器・直刀・刀子・鉄鏃・鉄輪・琥珀玉等が出土している。野口Ⅰ遺跡では住居状竪穴遺構やピット、焼土などが検出され、縄文時代前期～晩期の土器や石器などが出土している。荒木田Ⅱ遺跡では、陥し穴状遺構や溝状遺構などが検出され、縄文時代後・晩期の土器などが出土している。上斗内Ⅲ遺跡からは縄文時代後期に属する竪穴住居跡7棟のほか土坑や焼土などが検出され、縄文時代や奈良時代の土器など多くの遺物が出土している。上斗内Ⅳ遺跡では炭窯跡や土坑が検出され、上斗内Ⅴ遺跡からは奈良時代に比定される竪穴住居跡1棟や土坑などが検出され、土器や石器が出土している。

また発掘調査されたものではないが、小田島祿郎氏による町内の遺跡についての地表観察の結果が2例報告されている。一つは寺田林暮坪竪穴群で、10棟の竪穴の存在が報告され、他の一つは荒木田九ッ森古墳群で、尾根状の台地に大小6基の古墳が認められ、九ッ森の地名から元来は9基あったものと推定している。



第4図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	暮坪高地集落	集落跡	縄文土器(中期) 木炭	寺田暮坪	37	荒木田槽跡	槽跡		荒木田
2	滝ノ沢	散布地	縄文土器(中期)	荒木田間館	38	堂後Ⅰ	散布地	縄文土器(中器) ・須恵器	荒木田第3地割
3	子飼沢山高地集落	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田間館	39	堂後Ⅱ	散布地	土師器	荒木田4-5-2
4	寺沢Ⅰ	集落跡	縄文土器(晩期)	荒木田第1地割寺沢	40	堂後Ⅲ	散布地	土師器	荒木田
5	寺沢Ⅱ	集落跡	縄文土器(晩期)	荒木田1	41	九ツ森	墳墓		荒木田第7地割
6	寺沢Ⅲ	散布地	縄文土器	荒木田1-61	42	寺田館跡	館跡		寺田
7	寺沢Ⅳ	散布地	縄文土器	荒木田2-79	43	寺田	散布地	縄文土器(早期) ・尖底土器	寺田第8地割
8	寺沢Ⅴ	散布地	縄文土器	荒木田1-60	44	福田	集落跡	縄文土器・土師器	荒木田福田
9	寺沢Ⅵ	散布地	縄文土器(後期)	荒木田2-11-1	45	春宮田	散布地	土師器	帷子・春宮田
10	寺沢Ⅶ	散布地	縄文土器	荒木田2-82	46	赤間館	館跡		寺田
11	小曲沢Ⅰ	散布地	土師器	荒木田14	47	上関	散布地	土師器・須恵器	上関第4字割
12	小曲沢Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)	荒木田14-59	48	上関館	館跡		寺田
13	長渡沢	散布地	縄文土器(晩期)	荒木田14-61-1	49	川原口湧口	散布地	縄文土器(後晩期) ・土師器	帷子・川原目
14	間館Ⅱ	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田2-64-13	50	山崎野	集落跡		山崎・堀切
15	間館Ⅰ	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田	51	向館	館跡		山崎
16	上斗内Ⅰ	散布地	縄文土器	寺田上斗内	52	堀切館	館跡		堀切
17	上斗内Ⅱ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	53	川原口向い	散布地	土師器・須恵器	帷子・川原目
18	上斗内Ⅲ	集落跡	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	54	堀切えぞ館	館跡	縄文土器	平館・堀切
19	上斗内Ⅳ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	55	山崎一里塚	一里塚		平館第8地割堀切
20	上斗内Ⅴ	集落跡	縄文土器・土師器	寺田暮坪・上斗内	56	稲荷	散布地	縄文土器(後晩期) ・土師器	平館第5地割堀切
21	寺田暮坪	散布地	縄文土器	寺田暮坪・野口	57	稲荷山館	館跡		蟹沢
22	野口Ⅰ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・野口	58	堀切	散布地	縄文土器(晩期)	平館堀切
23	野口Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器	寺田暮坪・野口	59	平館	館跡		平館
24	野口Ⅲ	散布地	縄文土器	寺田・野口	60	大久保	集落跡	縄文土器・土師器	平館大久保
25	蒼前	散布地	縄文土器(前期) コップ型	寺田・蒼前	61	東部落	集落跡	土器・弥生(?) ・土師器	平館東部落
26	野口五輪塔	祭祀跡		寺田・野口	62	東部落Ⅱ	集落跡	土器・弥生(?)	平館東部落
27	治左エ門屋敷跡	屋敷跡		荒木田	63	間羽松	散布地	土師器	田頭第3地割
28	桜沢Ⅰ	散布地	土師器	荒木田4	64	落合	集落跡	土師器	平館落合
29	桜沢Ⅱ	集落跡	縄文土器 (前期～後期)	荒木田3	65	白屋	散布地	縄文土器	大更白屋
30	桜沢Ⅲ	散布地	土師器	荒木田14	66	館腰Ⅰ	散布地	土師器	田頭第26地割
31	桜沢Ⅳ	散布地	土師器	荒木田14	67	谷田森	集落跡	土師器	田頭館腰
32	荒木田Ⅰ	散布地	土師器	荒木田	68	北切	集落跡	縄文土器・土師器	大更北切
33	荒木田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器	荒木田	69	谷助平古墳	古墳	須恵器・土師器・直刀 鉄鏃・鉄輪・琥珀玉	大更渋川
34	荒木田Ⅲ	散布地	土器	荒木田	70	渋川えぞ館	散布地	土師器	大更渋川
35	荒木田Ⅳ	散布地	土師器	荒木田	71	渋川	散布地	土師器	大更渋川
36	荒木田館	館跡		荒木田	72	椀沢	散布地	縄文土器	平館椀沢

III 調査方法と室内整理の方法

1 野外調査

(1) グリッドの設定 (第5図)

調査区域は道路建設予定地に沿って東西に細長くのび、東西約250m、南北10~20mである。グリッドは道路中心坑№88と№86を北に10m水平移動させた2点を設定し、それぞれ基準点1、基準点2として、その2点を結ぶ直線を基準線(東西の軸線)とした。次に基準線に直交し、基準点1を通る直線を設定し、南北の軸線とした。基準点1を基点に南北の軸線に平行する直線で40m毎に区切り、大区画とした。大区画をさらに5mメッシュで区切り、小区画とした。グリッドの名称は大区画が西から東へI区、II区…とし、小区画は西から東へA~H、北から南へ00~06を与え、大区画名と組み合わせて、IA02区・IVG04区などのように呼称した。なお、磁北の方向は南北の軸線から19度30分東偏している。

基準点測量の結果、基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、および杭高(H)は以下のとおりである。

基準点1	X = -753.052	Y = 24193.265	H = 319.113m
基準点2	X = -739.422	Y = 24230.857	H = 321.803m

(2) 粗掘り・遺構検出

遺構検出面までの土層の除去及び遺構の検出は、すべて人力で行なった。粗掘り後、IV区・V区・VII区から若干の遺構が検出された。遺構名は小グリッド名を付し、IVH03土坑・VII B03陥し穴状遺構などのように呼称した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構精査は土坑・陥し穴状遺構は2分法によって掘り下げ、精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名、出土位置、レベルを記録し、遺構外のは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実測

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易的な遣り方を設定して行なった。ライン名はIV A02区の北西端(基準点1)を座標原点とし、北方向をN、南方向をS、東方向をE、西方向をWとし、1m単位で数字を付し、S1・W5のようにした。断面図は任意の高さで水平水糸を張り、作成した。実測図は20分の1の縮尺を基本とし、炉跡については10分の1の縮尺を用いた。

(5) 写真撮影

現場での写真撮影には、6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各

1台を使用した。

2 室内整理

(1) 作業内容

室内整理作業は昭和64年1月4日～平成元年2月28日までの期間で行ない、遺構実測図の点検・合成・トレース・遺物の仕分・登録・実測図作成・トレース・写真撮影・図版作成の順に進めた。

(2) 図版

本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は、土坑・陥し穴状遺構が40分の1、炉跡は20分の1である。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層はアラビア数字で表わした。方位は磁北を示す。遺物実測図及び土器拓影の縮尺は別に表示した。遺物に付した番号は縄文土器・弥生土器・土師器を一括して連番とし、石器・金属製品は各種別に連番とした。なお、図版番号と写真図版番号は統一している。

遺構図版、遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別は以下のとおりである。



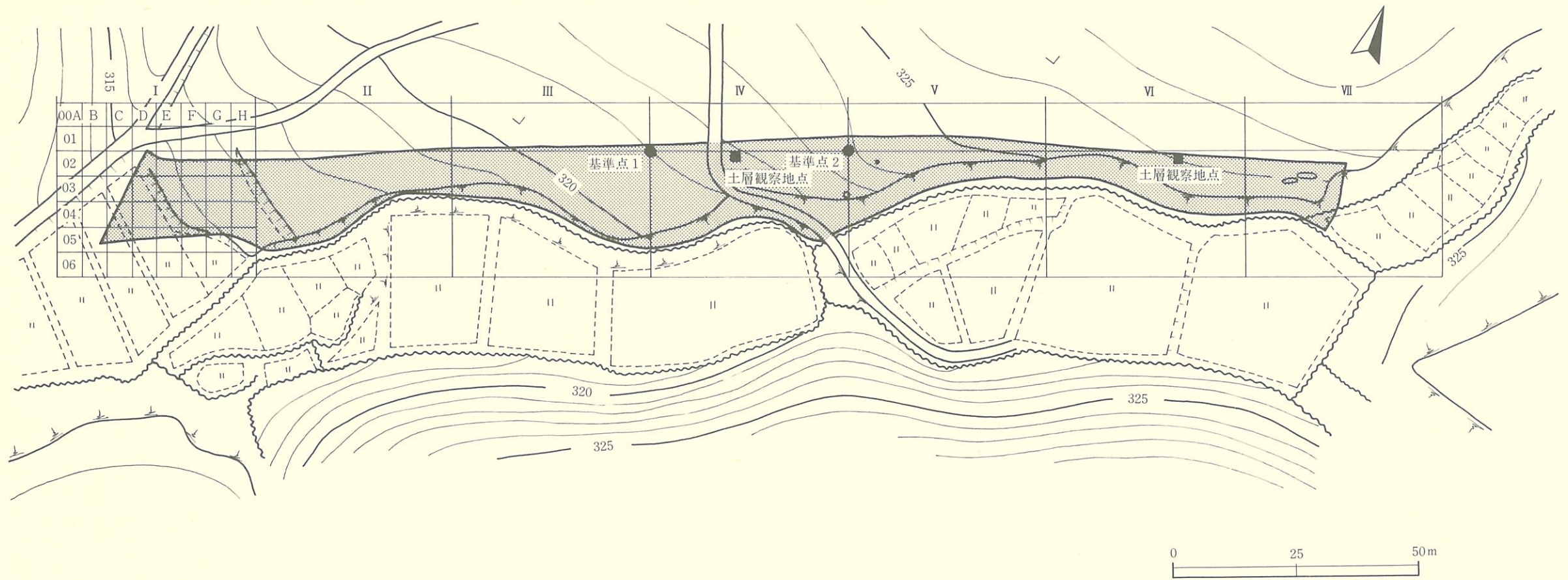
地山



焼土



磨石・光沢面



第5図 調査区周辺地形図・グリッド配置図



第6図 野口II遺跡遺構配置図

IV 検出された遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、土坑1基、陥し穴状遺構2基、石囲炉1基である。出土した遺物は縄文土器、弥生土器、古代の土師器、石器、古銭等である。

1 遺構と遺構内出土遺物

IV H03土坑

<遺構> (第7図 写真図版2)

本遺構は調査区中央部南寄りの緩斜面上に位置する。検出面は基本層序第V層褐色土上位面である。

平面形は開口部・底部共にほぼ円形であるが、底部が両側外方に張り出す形状を呈する。断面形は不整な台形状を呈する。規模は開口部径120cm、底部径116cm前後で、深さは最大46cmである。底面は中央付近が緩やかに凹む形状を呈し、かたくしまっている。壁は西側部分が底面から内傾して立ち上がり、他は底面から外傾して立ち上がる。埋土はおもに黒色土ブロックや褐色土ブロックが混入する黒褐色土で構成され、人為的な埋戻しの様相を呈する。

<出土遺物> (第7図 写真図版2)

底面直上から1～3の縄文土器片が出土している。深鉢の胴部片で、同一個体と考えられる。胎土には繊維が混入しており、器表面に不整な粗い縄文が施されている。

VII B03陥し穴状遺構

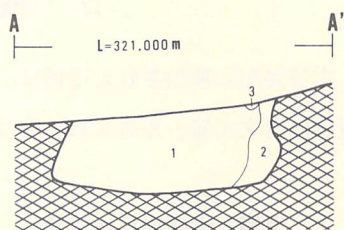
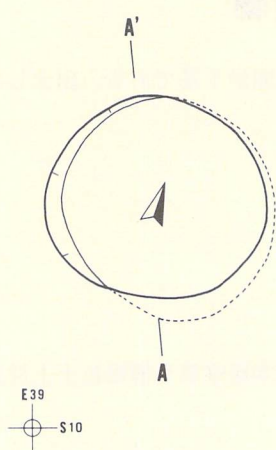
<遺構> (第7図 写真図版3)

本遺構は調査区東端部の斜面上に位置し、東にVII C02陥し穴状遺構が隣接する。検出面は基本層序第II層黒褐色土下位面である。

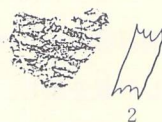
平面形は開口部・底部共に溝状で、短軸の断面形は開口部が開く「U」字状を呈する。規模は開口部長軸290cm・短軸55cm、底部長軸275cm・短軸15～30cmで、深さは最大60cmである。長軸の方向は北東—南西方向を示している。底面は若干起伏しており、北東端から南西端に向かって緩やかに上がる。この傾斜の方向は地形の傾斜方向に逆行する。長軸両端の壁は、南西端では底面から内傾して立ち上がり、北東端では底面からやや外傾して立ち上がり、開口部付近で外反する。埋土は上位から黒色土、黒褐色土の3層で構成され、層位状況から自然堆積と考えられる。

<出土遺物> (第7図 写真図版2)

4・5は埋土から出土した縄文土器片で、深鉢の胴部片である。2点共に胎土には繊維が混

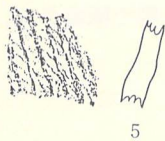
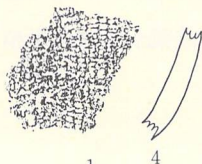
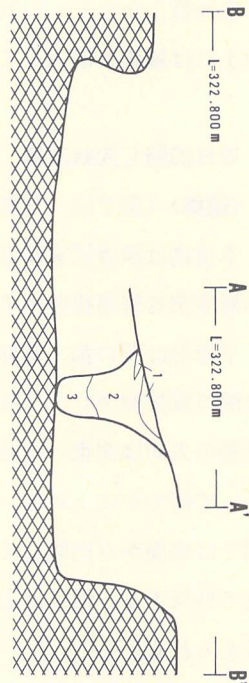
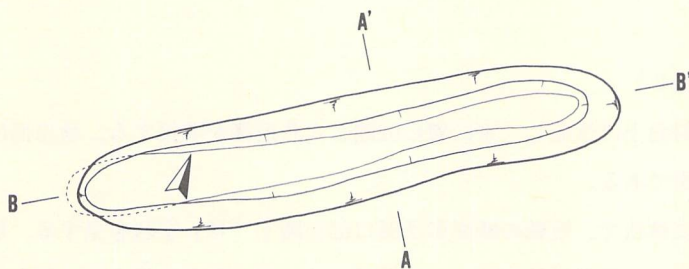


- 1. 10YR 2/2 黒褐色土 褐色土ブロック及び炭化材小片が混入
- 2. 10YR 3/3 暗褐色土 褐色土ブロックが混入
- 3. 10YR 4/6 褐色土



IVH 03 土坑・出土遺物

(遺物は $S = \frac{1}{3}$)



- 1. 10YR 1.7/1 黒色土
- 2. 10YR 2/1 黒色土
- 3. 10YR 2/2 黒褐色土
- 浮石粒や褐色土小ブロックが混入

(遺物は $S = \frac{1}{3}$)

VII B 03 陥し穴状遺構・出土遺物

第7図 IVH 03 土坑・VII B 03 陥し穴状遺構

入する。4は器形が丸底または尖底のものと推定され、RLの単節斜縄文が施される。5は斜位の撚糸文が施される。

ⅦC02陥し穴状遺構

〈遺構〉(第8図 写真図版3)

本遺構は調査区東端部の斜面上に位置し、西にⅦB03陥し穴状遺構が隣接する。検出面は基本層序第Ⅱ層黒褐色土下位面である。

平面形は開口部・底部共に溝状で、短軸の断面形は開口部が開く「U」字状を呈する。規模は開口部長軸400cm・短軸60cm、底部長軸378cm・短軸16～20cmで、深さは最大60cmである。長軸の方向は東北東—西南西方向を示している。底面は掘りすぎた部分はあるが、ほぼ平坦と考えられ、西南西端から東北東端に向かって傾斜して上がる。この傾斜の方向は地形の傾斜方向と同じである。長軸両端の壁は、西南西端では底面から内湾気味に立ち上がり、開口部付近で外反する。東北東端では底面から内湾気味に外傾して立ち上がる。埋土は上位から黒色土、黒褐色土の2層で構成され、層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

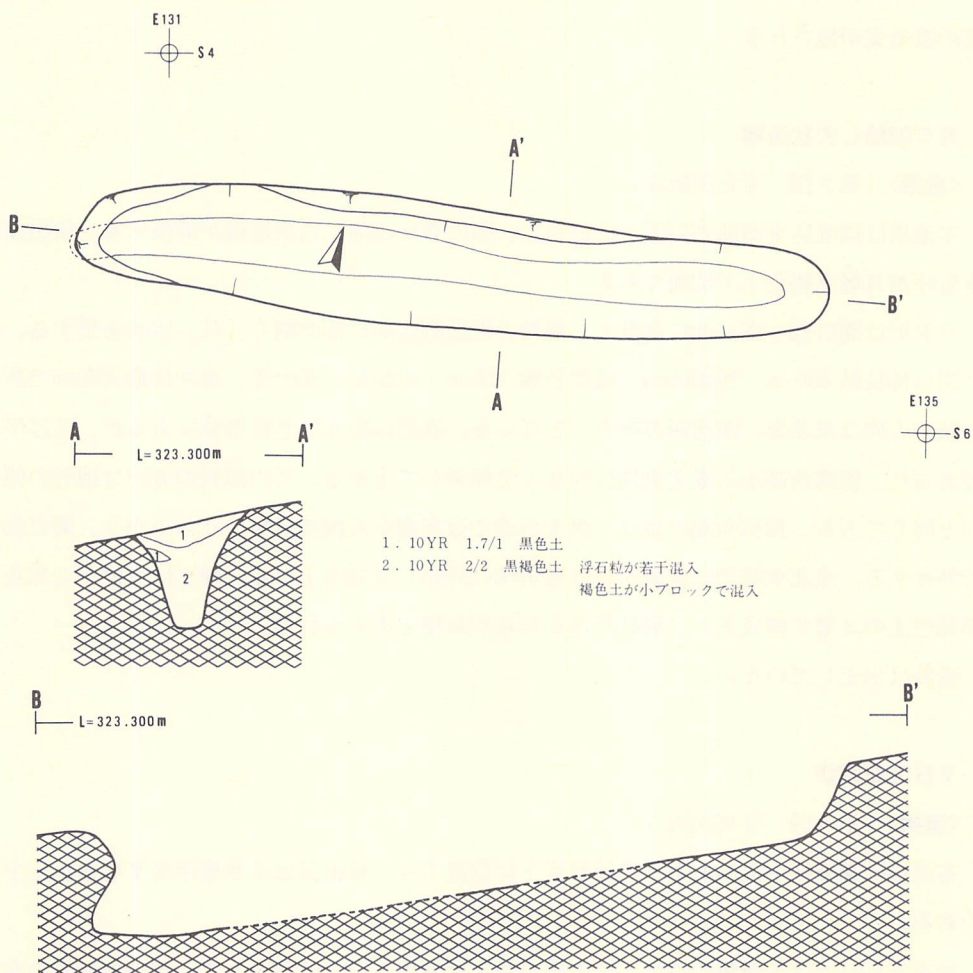
ⅤB02石囲炉

〈遺構〉(第8図 写真図版3)

本遺構は調査区中央部北寄りの緩斜面上に位置する。検出面は基本層序第Ⅴ層褐色土上位面である。

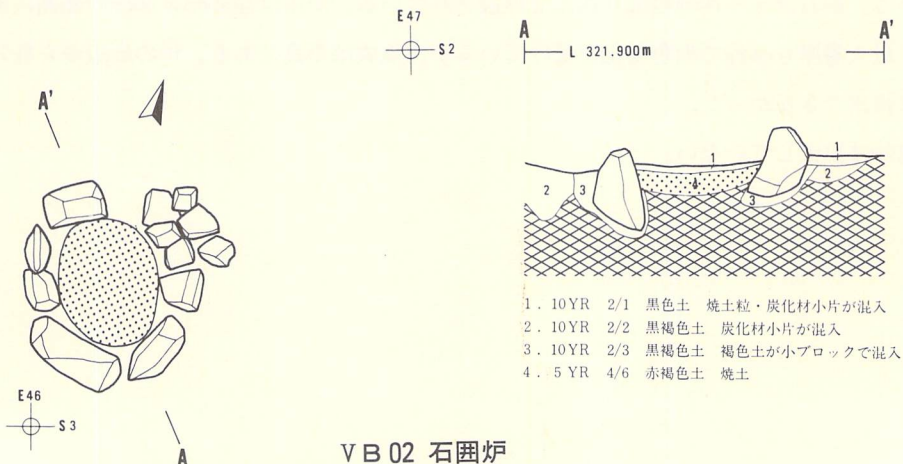
検出されたのは石囲炉のみで、炉の周辺の土は地山と全く区別できず、他の施設等の痕跡も確認できなかった。炉は偏平な亜角礫を埋設し、長径55cm・短径45cm程の長円形状に構築されている。炉石は5～10cm程掘り込んで埋設されている。炉床は径35cm×30cmの範囲に焼成を受け、最大層厚6cm程で赤色変化を受けているが、焼成は不良である。炉の周辺から柱穴や周溝等は検出できなかった。

遺物は出土していない。



- 1. 10YR 1.7/1 黒色土
- 2. 10YR 2/2 黒褐色土 浮石粒が若干混入
褐色土が小ブロックで混入

VII C 02 陥し穴状遺構



- 1. 10YR 2/1 黒色土 焼土粒・炭化材小片が混入
- 2. 10YR 2/2 黒褐色土 炭化材小片が混入
- 3. 10YR 2/3 黒褐色土 褐色土が小ブロックで混入
- 4. 5YR 4/6 赤褐色土 焼土

VB 02 石囲炉

第 8 図 VII C 02 陥し穴状遺構・VB 02 石囲炉

2 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、古代の土師器、石器、古銭等で、ほぼ遺跡全体から出土しているが、量的には非常に少ない。土器片がコンテナ2箱、石器類48点、古銭1点である。

(1) 土器

出土した土器は縄文土器、弥生土器、土師器である。縄文土器は時期別にⅠ～Ⅳ群に分類しⅤ群・弥生土器、Ⅵ群・土師器とした。

<第Ⅰ群土器> (第9図 写真図版4)

本群には縄文時代早期に属するものを一括し、文様等の違いから1～3類に細分した。

1類(6～9) 沈線文・貝殻腹縁文が施されるもので、ⅡB02区から一括して出土した。6・7は口縁部片、8・9は胴部片で同一個体と考えられる。胎土には粗砂が混入するもので磨減が著しい。器形は胴上半部～口縁部が外側に張り出す所謂キャリパー状を呈するもので、尖底の深鉢と考えられる。6・7は口唇部直下に横位の沈線文が1条巡らされ、その下位には押し引き沈線文や貝殻腹縁文によって幾何学的な文様が施される。同心円状の文様の中心部には刺突が施され、沈線文等によって三角形に区画された内側には貝殻腹縁文が充填される。8は胴部の破片で、屈曲部には低平な1本の隆帯が巡らされ、隆帯上に1個の突起が貼付され、刺突が施される。隆帯の上位には押し引き沈線文とそれに沿った貝殻腹縁文が横走する。9は胴下半部の破片で、貝殻腹縁文を沿わせた押し引き沈線文が横走し、その下位には横位の波形沈線文が施される。

2類(10) 1点の出土で、深鉢或いは鉢の口縁部片である。胎土には金雲母が混入し、焼成は良好である。文様は横位・斜位の沈線文によって区画が施された後、区画内部に平行する斜位の沈線文が施される。また器内面には条痕文が施される。

3類(11～14) 表裏に縄文が施されるもので、胎土には繊維が混入する。11・12は深鉢の口縁部片で、口唇部には縄文原体の圧痕が施される。13・14は胴部片で、4点共にLRの単節斜縄文が施され、内面には11が斜位、12～14には横位にLRの単節縄文が施される。

<第Ⅱ群土器> (第9・10図 写真図版4・5)

本群には縄文時代前期に属するものを一括し、文様等の違いから1～5類に細分した。

1類(15～17) ⅣC03区から一括出土したもので、同一個体である。胎土には繊維が多量に混入する。器形は底部が欠損しているが、胴中部から口縁部にかけて、ほぼ直に近い立ち上がりを示し、胴下半部が急に窄まるもので、丸底の深鉢と推定される。平縁で、口唇部に指頭状の圧痕が数箇所施される。口縁部を無文とし、口唇部直下に縄文原体の側面圧痕による幅

約8cmの文様帯をもつものである。口縁に平行な2条の側面圧痕文を施文して文様帯をきめた後、その間を2条からなる縦位の側面圧痕文で区切り、その間に半円状の側面圧痕文が上下から施される。胴部にはLRとRLの単節斜縄文が部位をかえて施され、部分的に粗いナデが横位に施される。

2類(18~22) 18~20は深鉢の口縁部片、21・22は胴部片で、胎土には繊維が混入し、焼成は比較的良好である。器形は胴部が屈曲の少ないもので、底部を欠くことから詳細は不明であるが、胴部片の傾きからは尖底をなすものと推定される。器表全面に整然としたLRの単節斜縄文が施される。

3類(23~26) 深鉢の口縁部片で、口縁部に不整な綾絡文が施されるものである。胎土には多量の繊維が混入する。平縁で、地文に縄文が施された後、口唇部直下に幅4cm程で横位の不整な綾絡文が数段にわたって施される。

4類(27) 1点の出土で深鉢の口縁部片である。胎土に繊維が混入し、結束第1種の羽状縄文が施される。

5類(28・29) 深鉢の口縁部片で、胎土に繊維が混入し、RLの単節斜縄文が施される。

〈第Ⅲ群土器〉(第10・11図 写真図版5~7)

本群には縄文時代後期に属するものを一括し、文様等の違いから1~4類に細分した。

1類(30~38) 深鉢または鉢の土器片で、沈線文の施されるものを一括した。30~32は胴部片で、地文にLRの単節斜縄文が施された後、浅い沈線文や平行沈線文が施される。33~35は口縁部片で波状口縁である。33・34はLRの単節斜縄文が施された後、沈線文や平行沈線文が施される。35はLRの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って波状の沈線文が施され、その下に沈線による曲線文が施され、曲線文の内側は磨消される。36・37は胴部片で、36はLRの単節斜縄文が施された後、平行沈線文が施される。37はLRの単節斜縄文が施された後、沈線文と磨消が施される。38は口縁部片で、口唇部に沿って2条の平行沈線文が施され、沈線間に管状刺突列が施される。

2類(39~41) 深鉢の胴部片で、隆帯をもつものである。3点共に縦位及び横位の隆帯で区画が施され、横位の隆帯は1本、縦位の隆帯は2本1対で貼付されるものようである。縦位の隆帯の両側に刺突が施され、横位のものでは隆帯上に刺突が施される。縦位の狭い隆帯間は無丈で、他の胴部には単節斜縄文が施される。

3類(60・61) 無文のもので、60は小型壺の口縁部片である。61は小型深鉢で、口径10.0cm、器高9.3cmである。器形は底部から口縁部に向かって直線的に開くもので、平縁である。

4類(42~59) 地文に縄文のみ施される粗製のものを一括した。42は口径19.2cm、器高19.0cmの深鉢で、RLの単節斜縄文が施される。43~49、51~53、56~57は平縁で、43・45~49・

53はLRの単節斜縄文、44・51・52はRLの単節斜縄文が施される。50は口唇部に指頭状の圧痕が連続的に施されるもので、地文はLRの無節斜縄文である。54・55は波状口縁で、LRの単節斜縄文が施される。56・57は平縁で、LRの無節斜縄文が施される。58・59は底部片で、58はRLの単節斜縄文が施され、59は底部外面に網代痕をもつ。

〈第Ⅳ群土器〉（第12図 写真図版7）

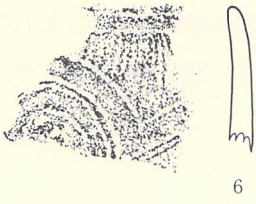
62～70の9点で縄文時代晩期に属するものであるが、すべて細片であり、器形・文様等詳細は不明のものである。62～66は鉢の口縁部片と考えられ、62・64・65・67は口縁部に小突起をもつ。口唇部直下に1～3条の沈線文が巡らされるもので、67は2個の粘土粒が貼付される。68～70は鉢の胴部片で、平行沈線文が施され、70は沈線文と磨消による区画文が施される。

〈第Ⅴ群土器〉（第12図 写真図版7）

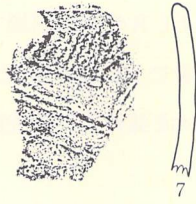
71～74の弥生土器片4点で、小型の鉢の破片と考えられる。71は口縁部片、72～74は胴部片で、いずれも斜位の撚糸文が施される。

〈第Ⅵ群土器〉（第12図 写真図版7）

75～81の土師器片7点である。75～78はロクロ不使用の甕の破片で、75・76は口縁部片である。75は口縁部が強く短く外反し、口縁部内外面共にヨコナデ、胴部内面にヘラナデが施される。76は口縁部が緩く外反し、内外面共にヨコナデが施される。77・78は胴部片で、共に外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。79～81は坏の口縁部片で、すべてロクロ使用のものである。



6



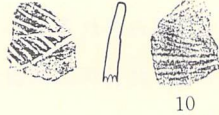
7



8



9



10



11



12

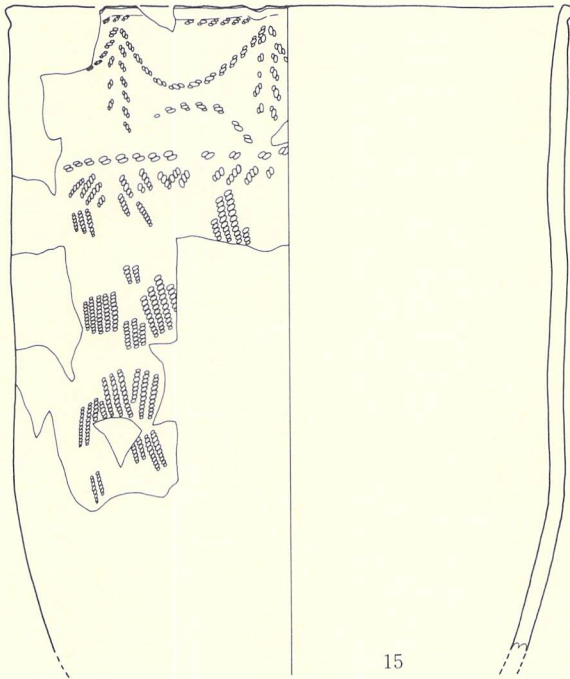


13

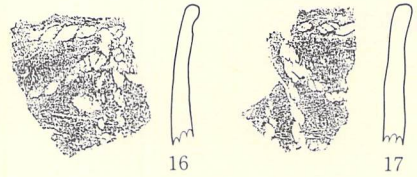


14

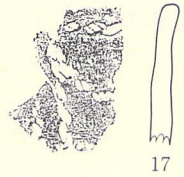
第I群土器



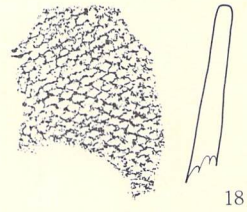
15



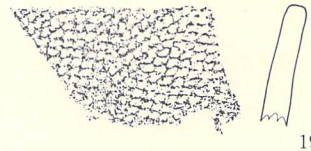
16



17



18

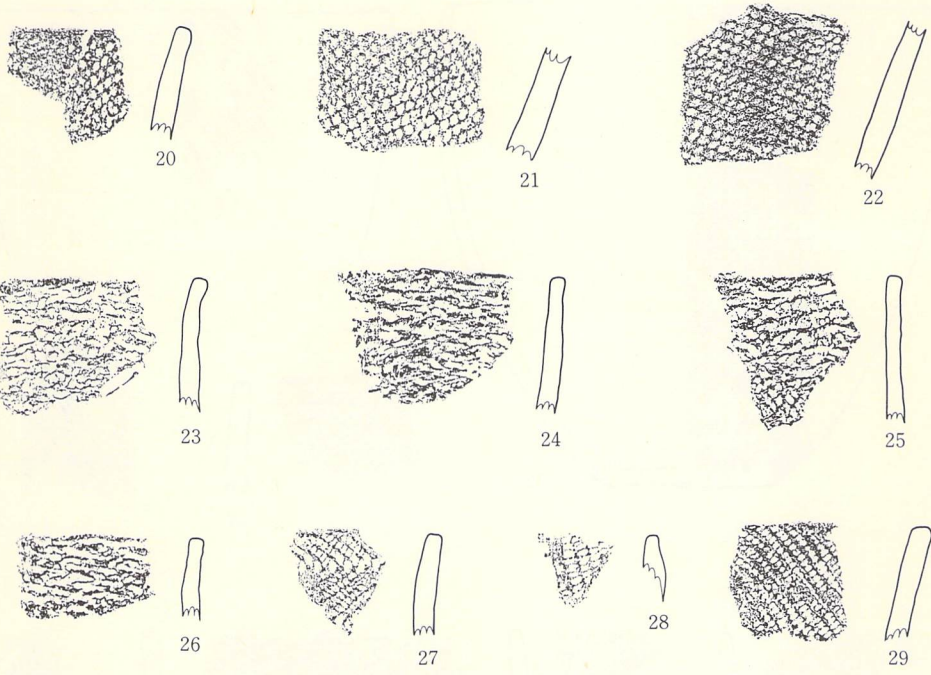


19

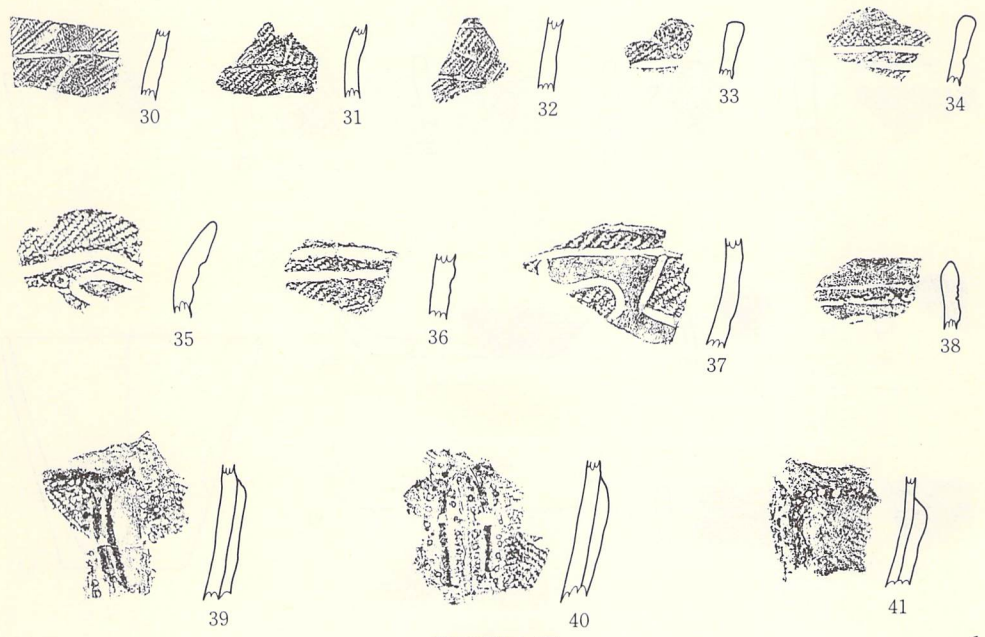
第II群土器

(15-S= $\frac{1}{4}$ ・他はS= $\frac{1}{3}$)

第9図 土器(1)



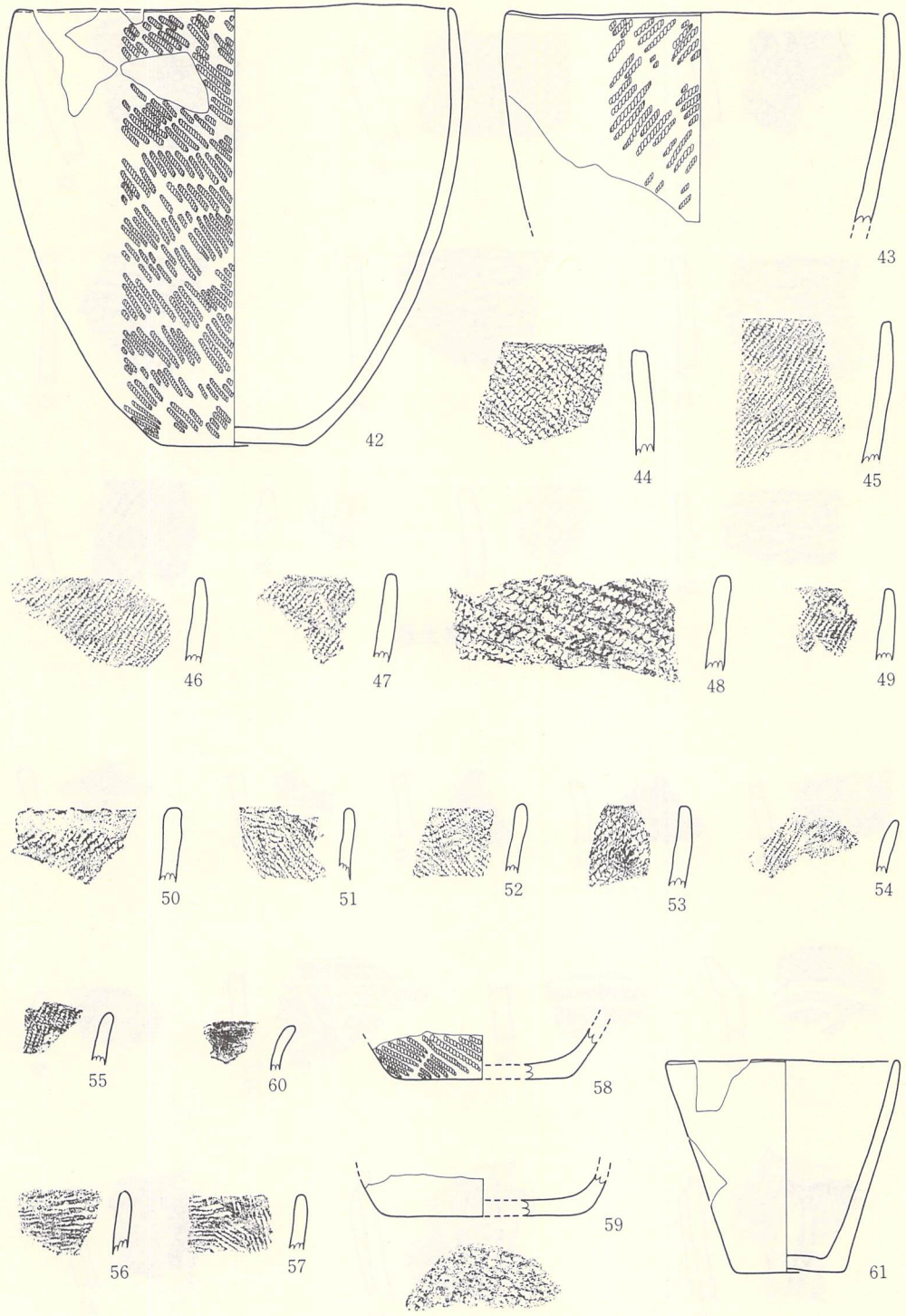
第II群土器



第III群土器

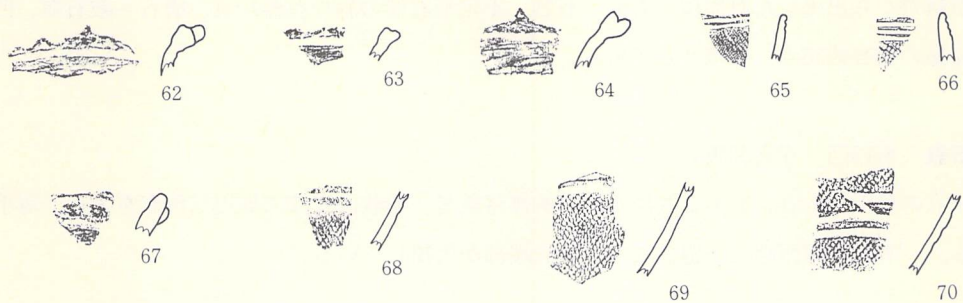
(S = $\frac{1}{3}$)

第10图 土器(2)

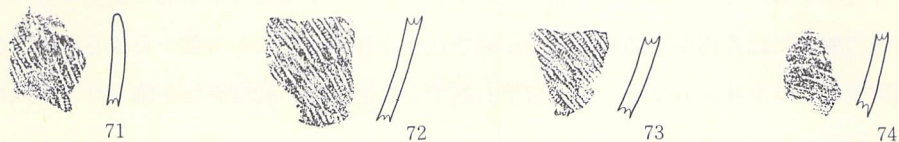


第Ⅲ群土器
第11图 土器(3)

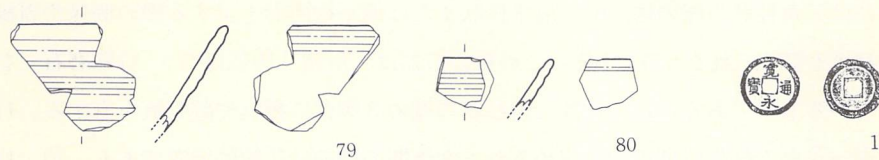
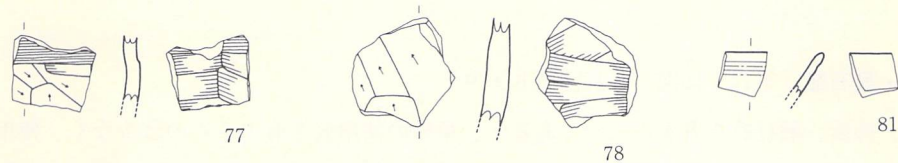
(S = $\frac{1}{3}$)



第IV群土器



第V群土器



第VI群土器

(S=1/3)

第12図 土器(4)・古銭

(2) 石器

遺構外から出土した石器は、石鏃、石匙、不定形石器の剥片石器10点、磨石・敲石類、凹石石皿類の礫石器36点、残核2点である。

石鏃（第13図 写真図版8）

2点の出土である。1・2共に所謂平基無茎鏃で、形状はほぼ二等辺三角形を呈し、薄手である。いずれも両面調整が施され、1は先端部が欠損している。

石匙（第13図 写真図版8）

3点の出土である。3・4は縦型石匙で、3は1側縁に両面からの剥離調整で凸状の刃部が形成され、他の側縁には片面からの剥離調整で直状の刃部が形成される。先端部は両面調整によりやや丸味をおびる。4はつまみ部が欠損するもので、1側縁の中央部に両面からの剥離調整が、他の側縁には片面からの剥離調整が施され、それぞれ直状の刃部が形成される。先端部は片面調整により丸味をおびる。5は横型石匙で、片面からの剥離調整が施され、直状の刃部が形成される。

不定形石器（第13図 写真図版8）

不定形な剥片の一部に細部調整が施されているものを一括した。6～10の5点が出土している。6は両側縁に片面からの剥離調整が施され、端部の一部に両面からの剥離調整が施されている。7は片面1側縁に剥離調整が施され、端部に両面からの剥離調整が施されている。8は短軸の断面形が三角形状の縦長の剥片の1稜部に片面からの剥離調整が施され、鈍角の刃部が形成される。9は1側縁に両面からの粗い剥離調整が施されている。10は片面1側縁に剥離調整が施され、鈍角の刃部が形成されるもので、ノッチ状の刃部を有する部位も認められる。

磨石・敲石類（第14・15図 写真図版8・9）

磨痕、擦痕、敲打痕を有するものであるが、単独の使用痕を有するものは少なく、使用痕の重複も多いことから一括して記載する。「擦る、敲き潰す」という機能を有するものと考えられる。11～23は三角柱状の礫の稜部や、偏平棒状または偏平楕円形を呈する礫の側縁や周縁に、擦痕や敲打痕が認められるものである。この種の石器は、所謂「棒状擦石」「特殊磨石」などと呼ばれているものである。11・12は三角柱状の礫の3稜部に擦痕や敲打痕を有する。11は1稜部に2面からなる細長い使用痕が認められ、2面間の稜線は比較的明瞭である。13・14は三角柱状の礫の2稜部に擦痕や敲打痕が認められるもので、13は1稜部に2面からなる使用痕が

認められ、2面間の稜線は比較的明瞭である。14は1稜部に比較的幅の広い使用痕が認められる。15～23は礫の稜部や側縁（周縁）の一部に細長い擦痕や敲打痕を有するものである。

24は偏平な円礫の表面に、磨滅、磨耗による光沢面を有するもので、側縁部及び裏面は欠損している。

凹み石（第15～18図 写真図版9～11）

24～45の21点が出土している。25は磨石を転用したもので、表面に凹みと磨滅による光沢面を有する。26は断面三角形の礫の1面に浅い2箇所凹みをもち、他の1面には磨滅による光沢面を有する。29・33・36・37・41は表面1箇所に凹みをもつものである。27・32・44は表面に複数の凹みを有するもので、27は3箇所の凹みをもち、周縁の一部に擦痕が認められる。32・44は縦長の偏平な礫の表面に複数の連続する浅い凹みが認められる。28・30・31・34・38・40・43は表裏両面に凹みを有するもので、38は1側縁に敲打痕をもつものである。35・45は表裏両面と1側縁に凹みを有するもので、45は1側縁の一部に擦痕が認められる。39・42は断面三角形の礫の3面に凹みを有するものである。

石皿類（第19図 写真図版11）

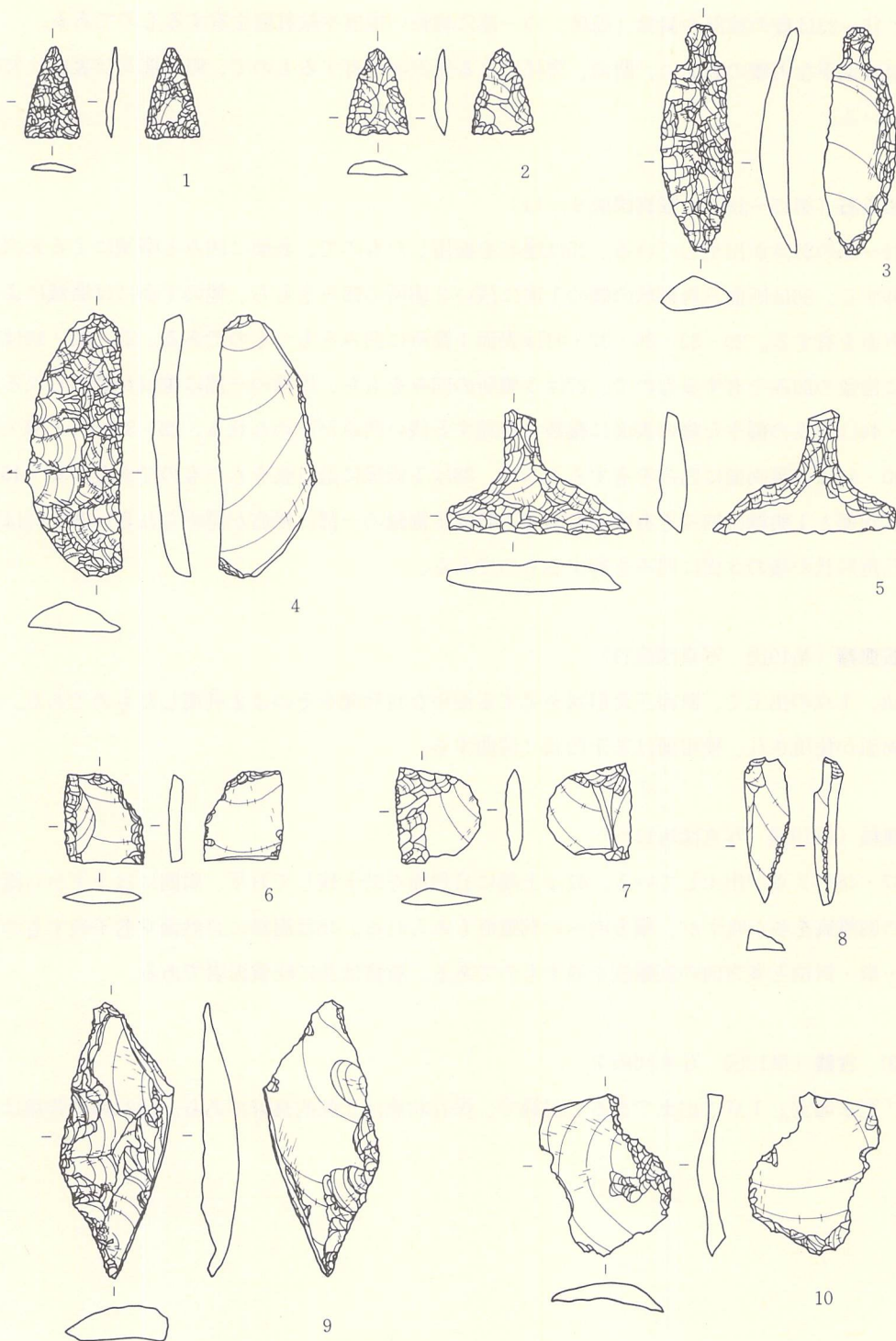
46、1点の出土で、断面三角形を呈する偏平な自然礫をそのまま利用したものである。表裏両面が使用され、使用面は若干凹状に湾曲する。

残核（第19図 写真図版11）

47・48の2点が出土している。47は上端に自然面を若干残しており、周囲には上下から縦方向の剥離痕を多く残すが、横方向への剥離痕もみられる。48は周縁に自然面を若干残すもので縦・横・斜位と多方向の剥離痕を残すものである。石質は共に珉質泥岩である。

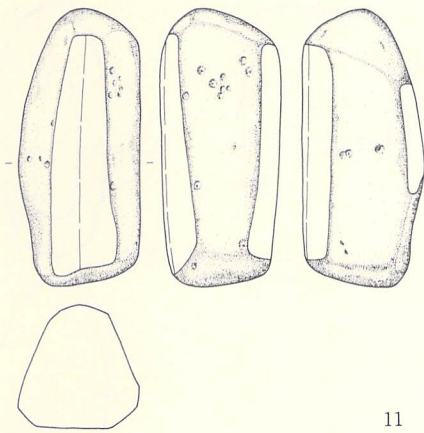
(3) 古銭（第12図 写真図版7）

「寛永通宝」1点の出土である。銅銭で、保存状態は比較的良好である。径24mmで背銘はない。

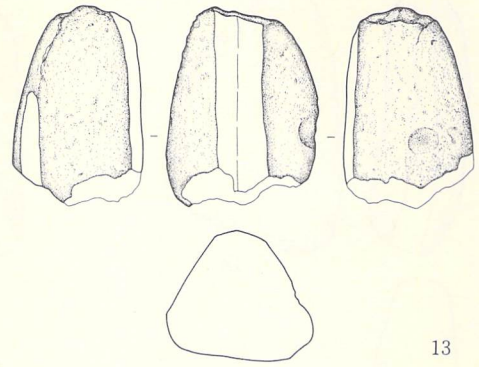


(S=1/2)

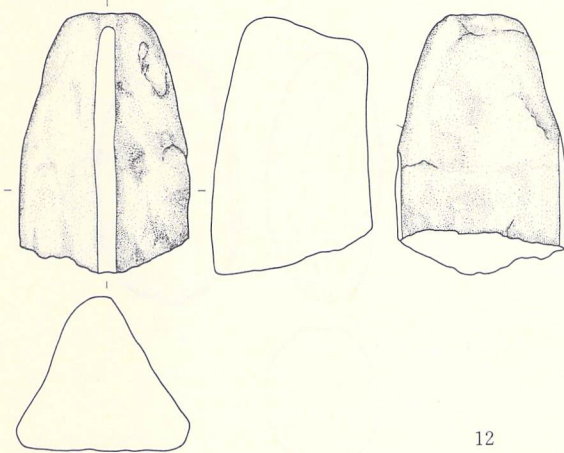
第13图 石器(1)



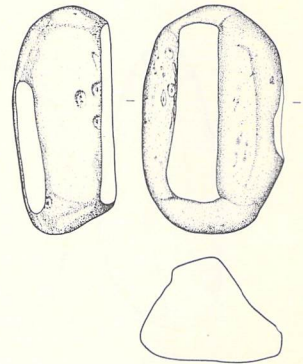
11



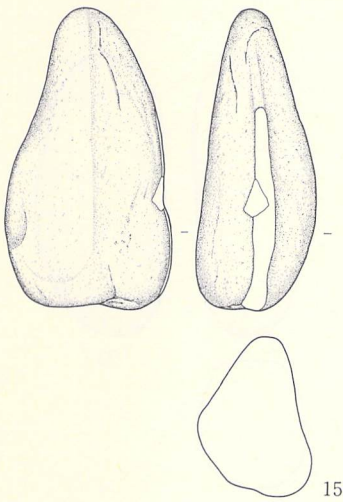
13



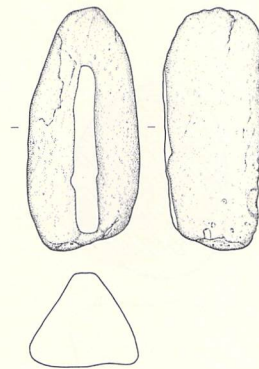
12



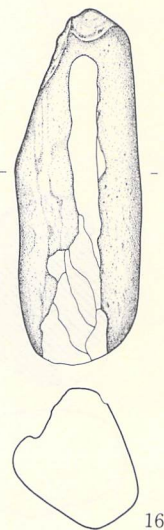
14



15

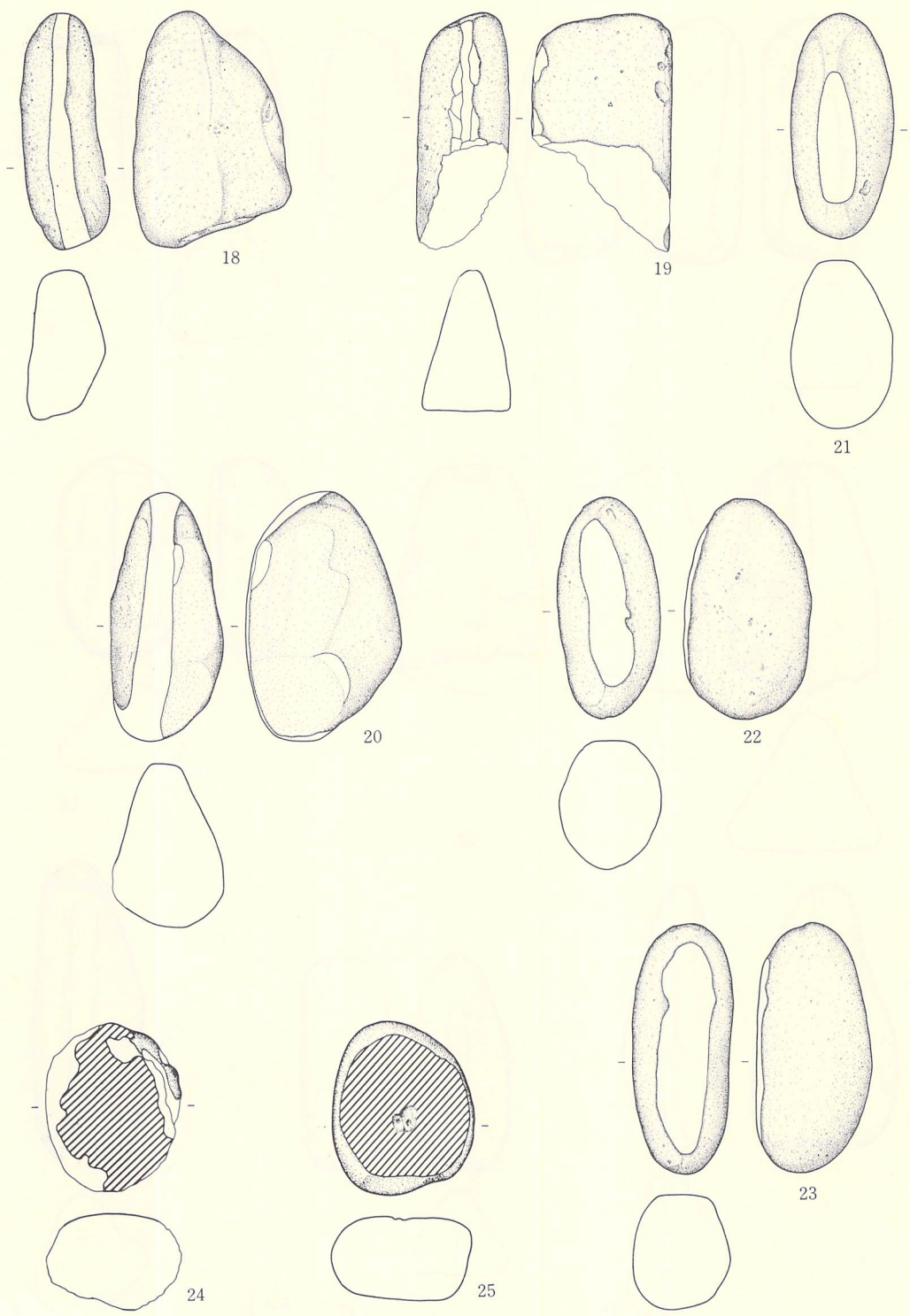


17 (S=1/4)

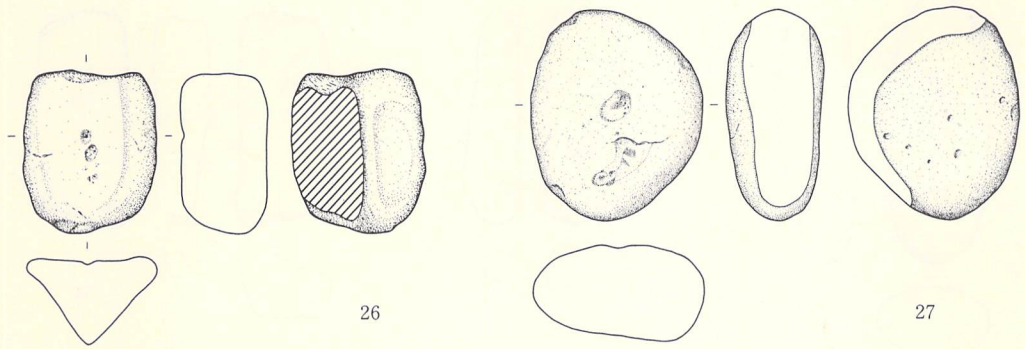


16

第14図 石器(2)

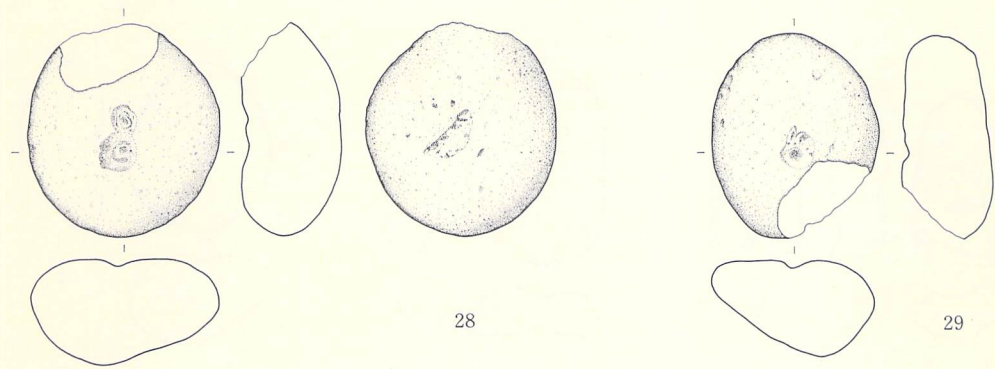


第15図 石器(3)



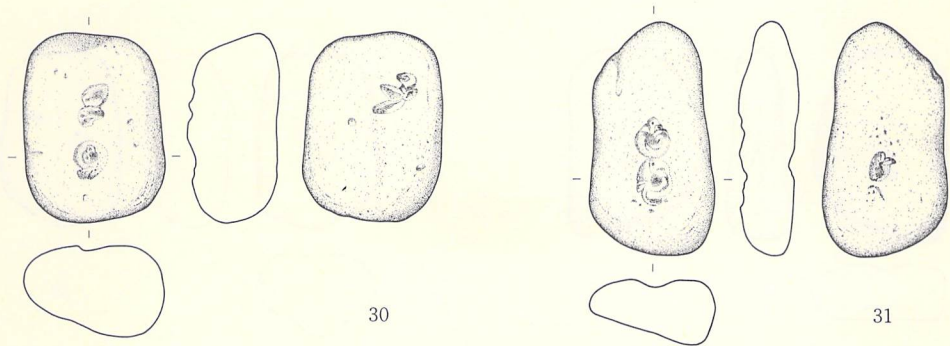
26

27



28

29

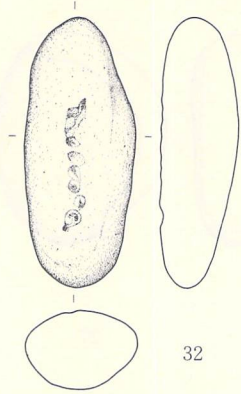


30

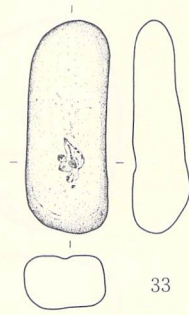
31

(S = $\frac{1}{4}$)

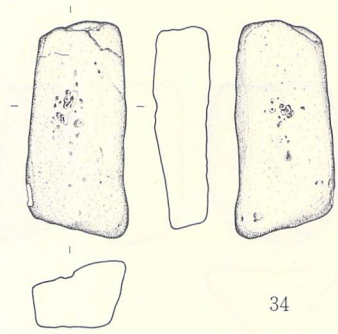
第16图 石器(4)



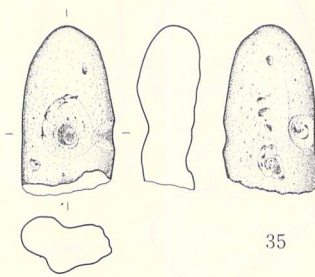
32



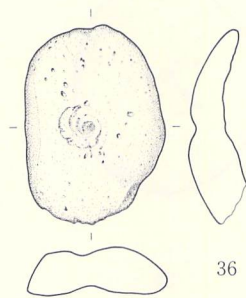
33



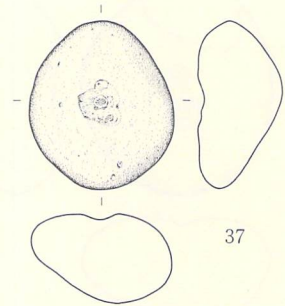
34



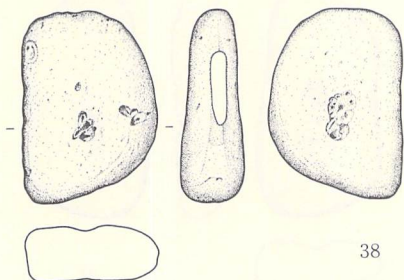
35



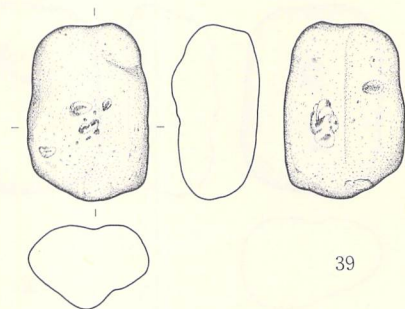
36



37



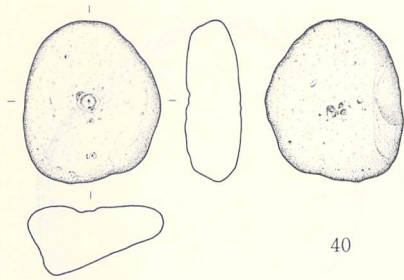
38



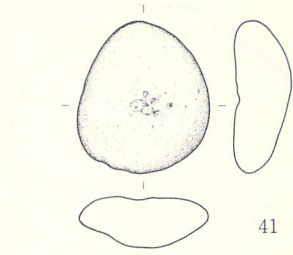
39

(S = $\frac{1}{4}$)

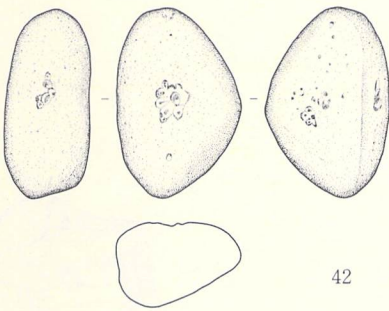
第17图 石器(5)



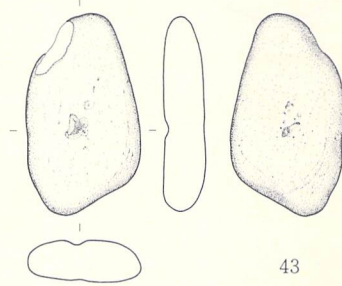
40



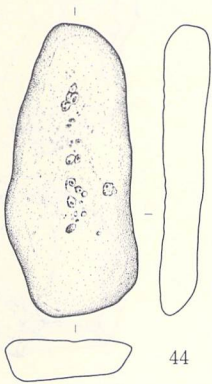
41



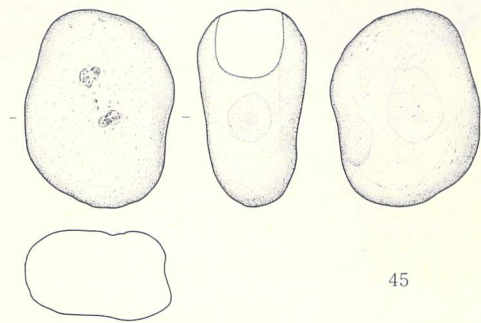
42



43



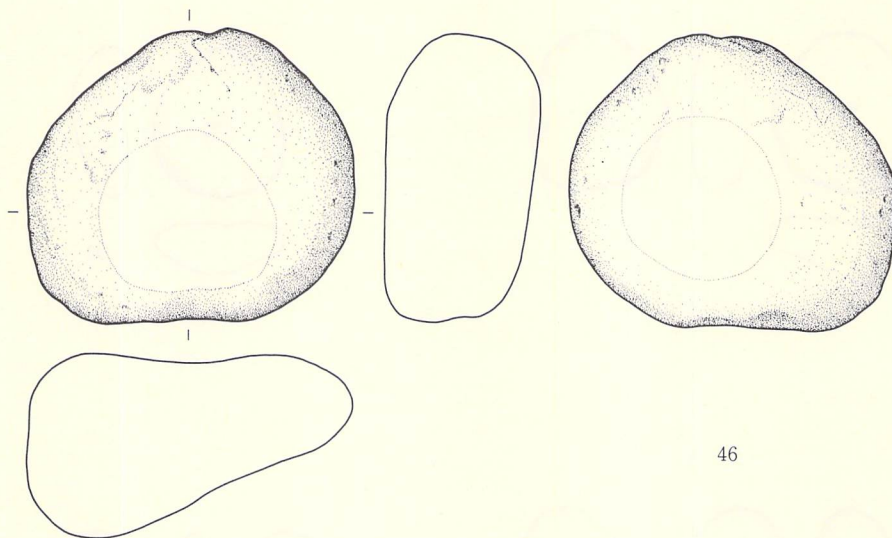
44



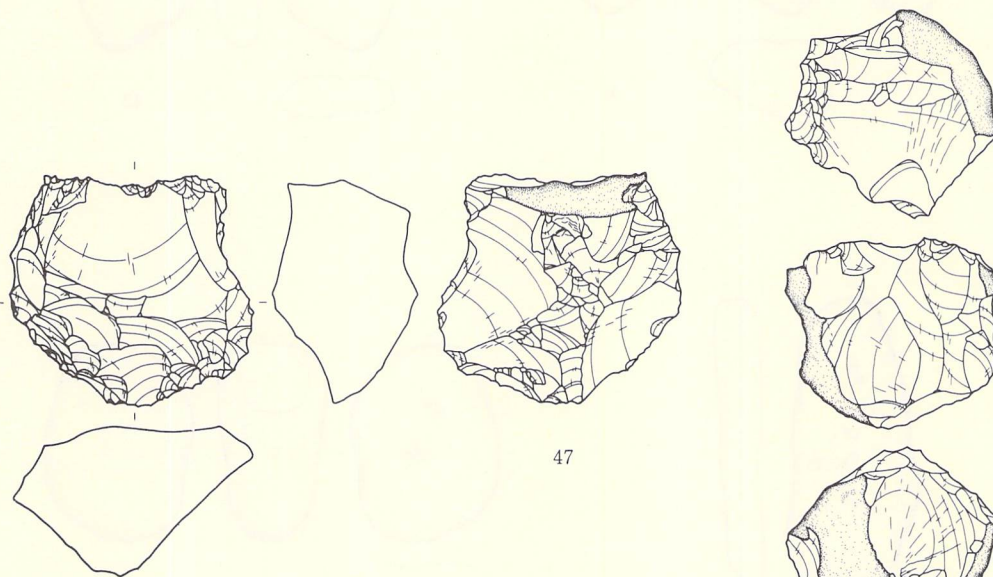
45

(S = $\frac{1}{4}$)

第18図 石器 (6)



46



47

48

(46-S = $\frac{1}{4}$ · 47.48-S = $\frac{1}{3}$)

第19図 石器 (7)

第2表 石器一覧表

登録番号	器種	出土地点	法 量				石 質	産 地	掲載番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
001	石 鏃	Ⅳ A 03区	2.6	1.6	0.3	1.0	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	1
002	石 鏃	Ⅲ H 05区	2.5	1.8	0.4	1.2	珪質泥岩	奥羽山地	2
003	石 匙	Ⅳ B 03区	6.5	2.0	0.9	9.5	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石)	3
004	石 匙	Ⅴ A 03区	2.8	7.5	0.8	20.5	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	4
005	石 匙	Ⅲ F 04区	3.5	5.3	0.9	9.6	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	5
006	不定形石器	Ⅳ B 03区	2.6	2.2	0.4	3.2	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	6
007	不定形石器	Ⅳ C 02区	2.8	2.4	0.5	3.6	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	7
008	不定形石器	Ⅲ H 05区	4.2	1.3	0.6	3.4	玻璃質流紋岩	奥羽山地	8
009	不定形石器	Ⅵ 区	8.0	3.2	1.0	24.6	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	9
010	不定形石器	Ⅳ B 03区	4.6	3.8	0.7	9.1	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	10
011	磨 石	Ⅴ D 02区	12.0	7.5	5.4	700	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	14
012	磨 石	Ⅳ C 03区	14.7	6.9	6.5	920	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	11
013	磨 石	Ⅴ A 02区	10.5	8.0	6.6	650	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	13
014	磨 石	Ⅵ 区	(13.7)	9.0	8.3	1,240	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	12
015	磨 石	Ⅵ 区	15.9	6.0	8.5	1,000	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	15
016	磨 石	Ⅵ 区	18.7	6.3	7.6	1,140	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	16
017	磨 石	Ⅴ A 02区	12.9	5.9	5.1	530	硬砂岩	北上山地	17
018	磨 石	Ⅳ F 03区	14.0	5.4	9.5	750	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	18
019	磨 石	Ⅵ 区	(14.0)	5.5	8.3	640	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	19
020	磨 石	Ⅴ A 02区	14.9	6.7	9.7	930	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	20
021	磨 石	Ⅳ B 03区	13.4	6.1	10.0	1,140	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	21
022	磨 石	Ⅳ C 03区	13.2	6.1	7.6	750	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	22
023	磨 石	Ⅳ C 03区	14.9	5.8	6.9	860	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	23
024	磨 石	Ⅵ 区	10.1	8.1	5.7	600	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	24
025	凹・磨石	Ⅴ A 02区	10.4	8.4	5.0	700	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	25
026	凹 石	Ⅳ C 03区	(11.2)	10.0	5.7	790	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	28
027	凹 石	Ⅵ 区	11.0	9.1	5.1	620	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	27
028	凹 石	Ⅲ A 02区	(10.8)	8.8	5.2	550	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	29
029	凹 石	Ⅳ 区	10.0	7.0	4.9	520	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	30
030	凹 石	Ⅳ E 03区	9.2	5.9	4.2	400	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	32
031	凹 石	Ⅳ D 02区	12.5	6.7	3.5	360	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	31
032	凹 石	Ⅲ H 03区	11.3	4.4	2.8	240	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	33
033	凹 石	Ⅳ D 02区	11.5	5.4	3.5	320	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	34
034	凹 石	Ⅵ 区	(8.9)	4.9	3.0	170	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	35
035	凹 石	Ⅴ F 01区	(10.5)	7.4	2.5	250	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	36
036	凹 石	Ⅴ E 02区	10.1	7.1	3.9	350	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	38
037	凹 石	Ⅳ D 02区	9.0	7.7	4.8	380	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	37
038	凹 石	Ⅳ C 02区	9.8	6.5	4.5	335	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	39
039	凹 石	Ⅳ D 02区	8.5	7.3	3.7	250	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	40
040	凹 石	Ⅴ A 03区	10.1	6.6	4.4	340	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	42
041	凹 石	Ⅳ E 02区	7.9	7.0	2.7	192	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	41
042	凹 石	Ⅴ F 02区	10.5	7.9	4.9	630	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	45
043	凹 石	Ⅳ D 02区	10.7	6.1	2.2	185	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	43
044	凹 石	Ⅳ D 02区	15.5	7.0	2.3	410	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	44
045	凹・磨石	Ⅴ E 01区	8.7	7.1	4.7	365	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	26
046	石 皿	Ⅳ E 03区	15.5	17.2	9.7	3,100	両輝石安山岩熔岩	奥羽山地	46
047	残 核	Ⅳ B 04区	—	—	—	485	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	47
048	残 核	Ⅳ B 04区	—	—	—	520	珪質泥岩	奥羽山地(磐石)	48

V まとめ

1 遺構

検出された遺構は土坑1基、陥し穴状遺構2基、炉跡1基である。ⅣH03土坑は、底面から縄文時代前期に属する繊維の混入する土器片が出土していることや、検出面の状況等からほぼ縄文時代前期を上限とする遺構と考えるのが妥当であろう。陥し穴状遺構2基は、占地の状況・形状・規模・埋土の状況等からほぼ同時期のものと考えられ、1基の埋土から縄文時代前期に属する土器片が出土していることや、検出面の状況等から縄文時代に属する遺構と考えられる。同様の遺構は荒木田Ⅱ遺跡ほか多数の遺跡から検出されている。炉跡は石囲炉だけの検出で、住居跡に伴うものであるかどうかは資料が得られておらず不明である。遺構の時期は検出面の状況から縄文時代と推定される。

2 遺物

遺物は量は少ないものの、縄文時代早期～晩期（中期を除く）の各時期の土器と若干の弥生土器、土師器、及び石器と古銭が出土している。これらのうちで、土器の大半を占める縄文土器を中心に若干記述する。

第Ⅰ群土器は早期中葉～末葉に位置づけられるもので、1類土器はキャリパー状の器形を呈し、沈線文や貝殻腹縁文が施されることから、物見台式に相当しよう。2類土器は条痕文系の土器で、沈線文が施されるものである。これは売場遺跡（Ⅵ群A₂類）等に類例があり、早稲田3類、ムシリⅠ式に相当するものと考えられる。3類土器は表裏両面に縄文が施されるもので早稲田4類、赤御堂式に相当するものとも考えられるが、赤御堂式の場合は胎土に繊維の混入しないものが多いこと、また混入しても極く少ないことから、当遺跡のものは繊維の混入が比較的多く、赤御堂式よりは若干時期が下がるものかもしれない。

第Ⅱ群土器はほぼ前期初頭～前葉に位置づけられるものである。1類土器は丸底の深鉢と推定され、縄文原体の側面圧痕文によって口縁部文様帯が構成されるもので、長七谷地貝塚遺跡（Ⅲ群Aa類）、長者森遺跡（Ⅱ群a類）、大久保遺跡（Ⅴ群4類）等に類例がみられ、これらは前期初頭の花積下層式、上川名Ⅱ式に類似するものである。2類土器は胎土、器形、文様等が仏沢Ⅲ遺跡（Ⅱ群2類）、和野前山遺跡（8群E類）出土のものに酷似しており、これらは前期初頭の早稲田6類に相当するものと考えられる。3類土器は口縁部に不整綾絡文による文様帯が構成されるもので、上里遺跡（Ⅱ群5類）、崎山貝塚等に類例がみられる。これらは大木Ⅰ式、円筒下層a式にみられるものであり、当遺跡のものもほぼそれらに相当するものであろう。4類土器は胎土に繊維が混入し、結束第1種の羽状縄文が施されるもので、湯舟沢遺跡（Ⅱ群）、

仏沢Ⅲ遺跡（Ⅱ群4類）からも出土しており、ほぼ大木1式期に併行するものと考えられる。

第Ⅲ群土器は後期に位置づけられるものであるが、ほぼ後期初頭～前葉に属するものと考えられる。2類の隆帯による区画が施されるものは、田面木平遺跡（Ⅴ群、後期初頭）から出土しているものに類似する。

第Ⅳ群土器は文様の特徴等から、ほぼ晩期中葉に属するものと考えられる。

また、第Ⅵ群土器は土師器であるが、甕の口縁部形態や坏がロクロ使用のものであることなどから、これらは平安時代に属するものと考えられる。

上記の土器のほかに若干の石器等が出土しているが、これら遺物の出土状況を見ると、大半が北側の斜面上方からの流れ込みの様相を呈しており、層位的に区分し得るものではなかった。調査区は丘陵の南端に位置し、北側斜面上方に平坦面が広がっていることから、遺跡の主体部は北側に広がるものと推測され、縄文時代から平安時代の集落が存在する可能性がある。

〈引用・参考文献〉

- 岩手県企画開発室 「土地分類基本調査 沼宮内」 1975
- 草間俊一 「岩手県谷助平古墳」 岩手大学学芸学部研究年報第18巻 1961 岩手大学
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「野口Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 1988
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 1985
- 岩手県埋蔵文化財センター 「上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書」 1984
- 小田島祿郎 「県北に於ける堅穴及『チャシ』に関するもの其一」 1924
岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書第4号 岩手県
- 小田島祿郎 「県北に於ける古墳の二三」 1925
岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書第6号 岩手県
- 青森県教育委員会 「売場遺跡発掘調査概要報告書」 1984
- 八戸市教育委員会 「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」 1976
- 三本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 「青森県上北郡早稲田貝塚」 1958
考古学雑誌第43巻第3号
- 名久井文明 「貝殻尖底文土器」 縄文文化の研究3
- 青森県教育委員会 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 「長者森遺跡発掘調査報告書」 1982
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「大久保・西久保遺跡発掘調査報告書」 1988
- 滝沢村教育委員会 「仏沢Ⅲ遺跡」 1987
- 青森県教育委員会 「和野前山遺跡」 1983

滝沢村教育委員会・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「湯舟沢遺跡」 1986

岩手県埋蔵文化財センター 「上里遺跡発掘調査報告書」 1983

宮古市教育委員会 「崎山遺跡群1」 1987

八戸市教育委員会 「田面木平遺跡(1)発掘調査報告書」 1987

写真図版

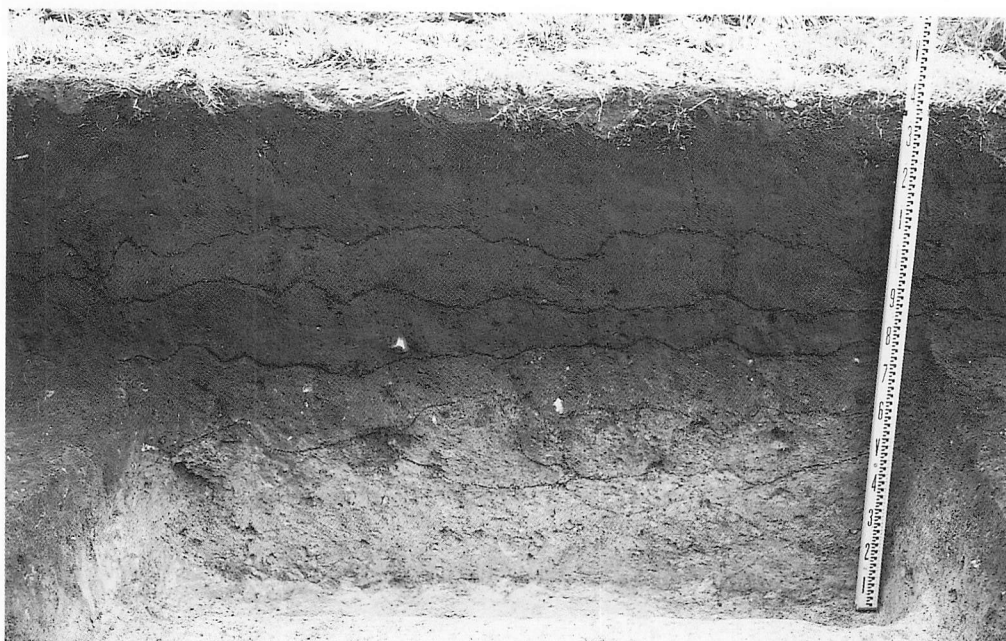


遺跡近景（調査終了後、東から）



遺跡近景（調査前、西から）

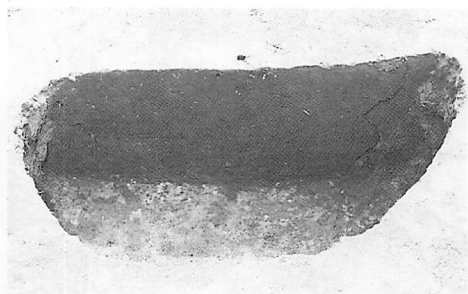
写真図版 1 遺跡近景



基本土層 (VI区)

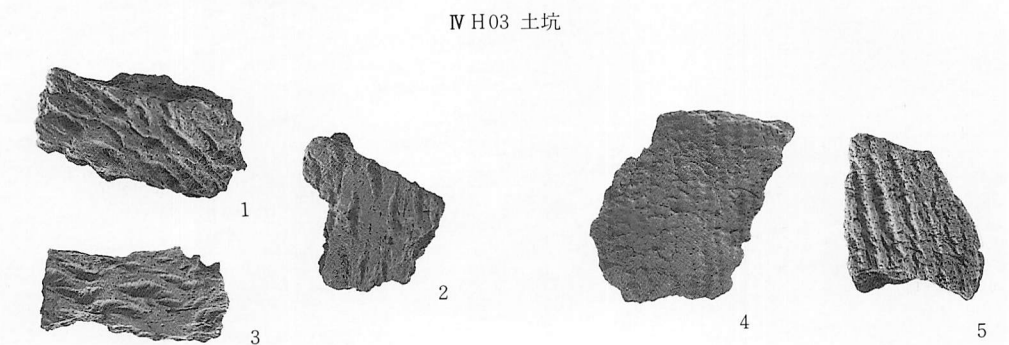


全 景



埋土断面

IV H03 土坑



IV H03 土坑出土遺物

VII B03 陥し穴状遺構出土遺物

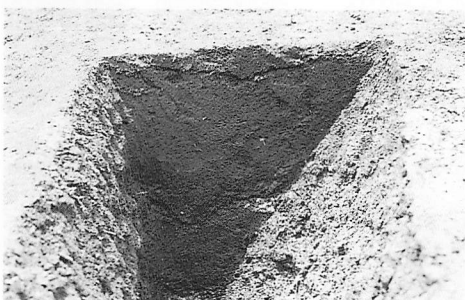
写真図版 2 基本土層・遺構(1)



全 景



全 景



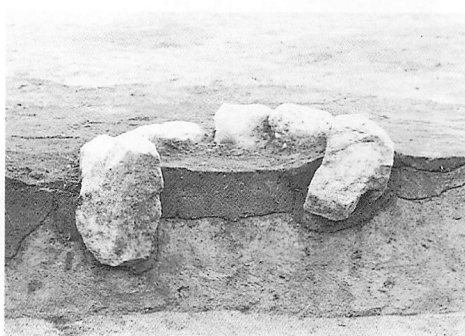
埋土断面
Ⅶ B 03 陥し穴状遺構



埋土断面
Ⅶ C 02 陥し穴状遺構



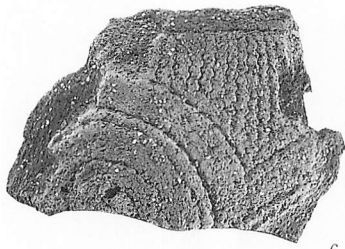
全 景



断 面

V B 02 石囲炉

写真図版 3 遺構 (2)



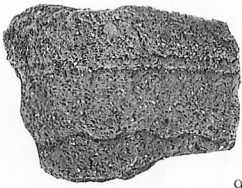
6



7



8



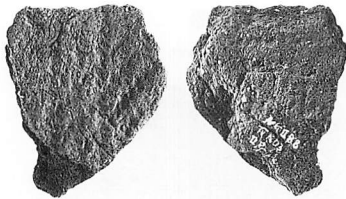
9



10



11



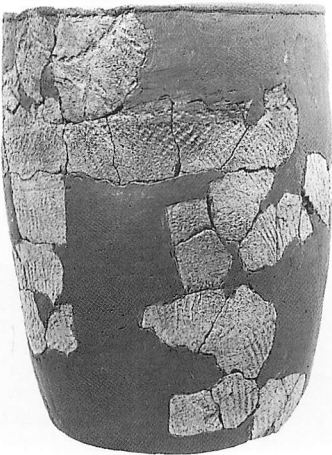
12



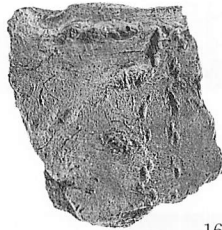
13



14



15



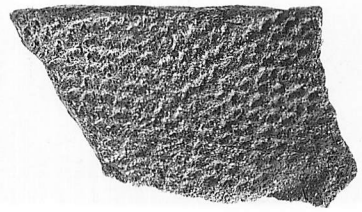
16



18

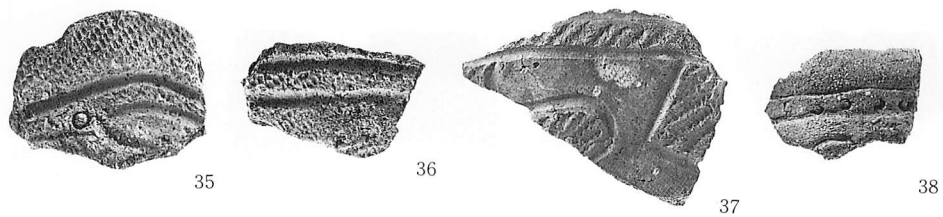
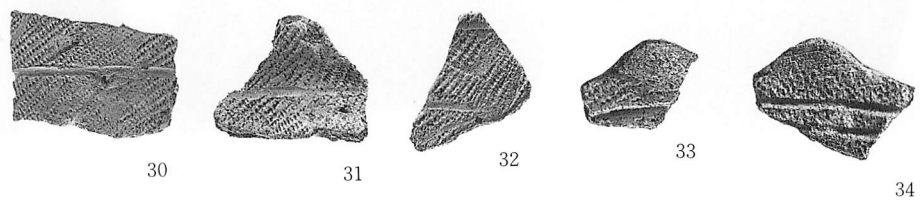
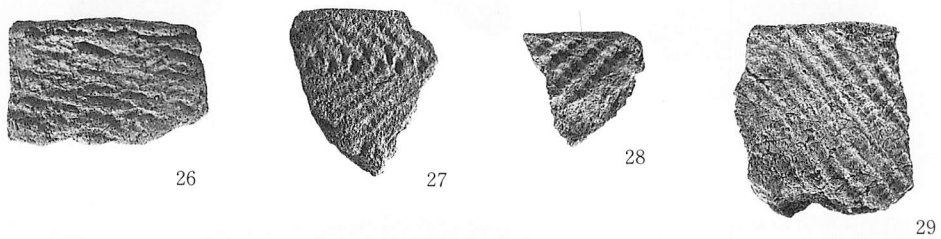
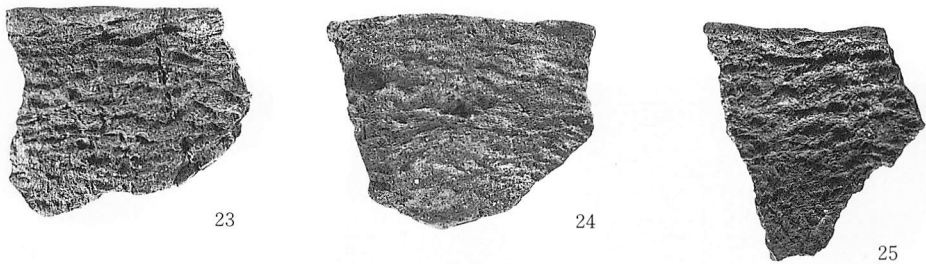
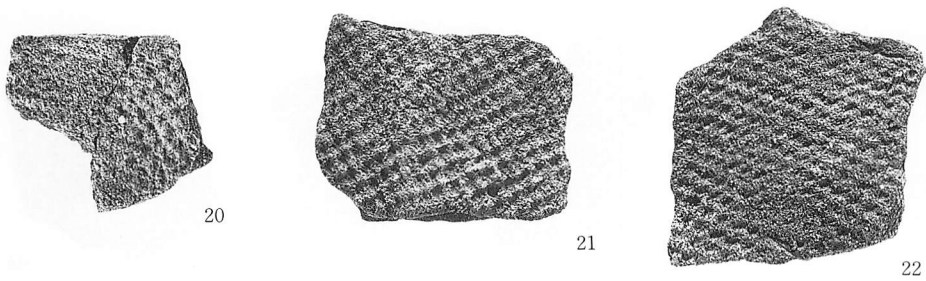


17

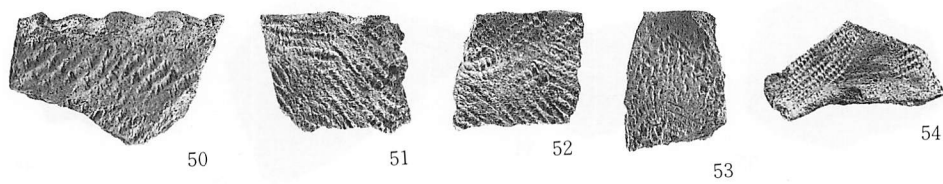
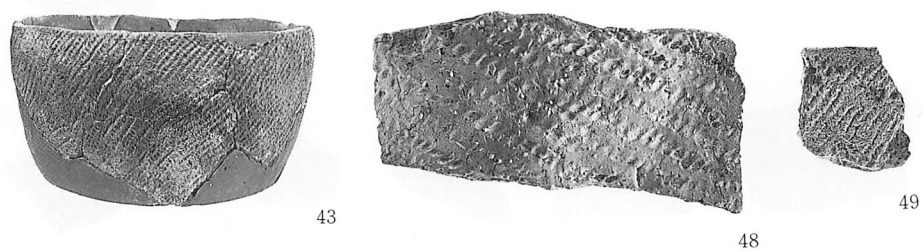
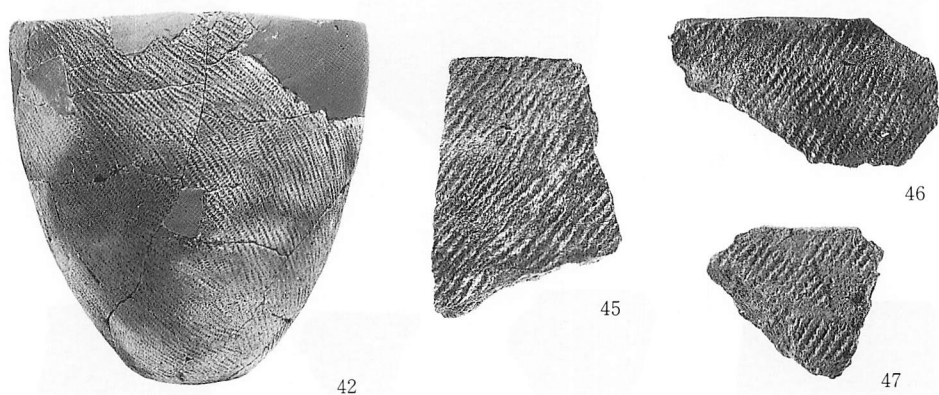
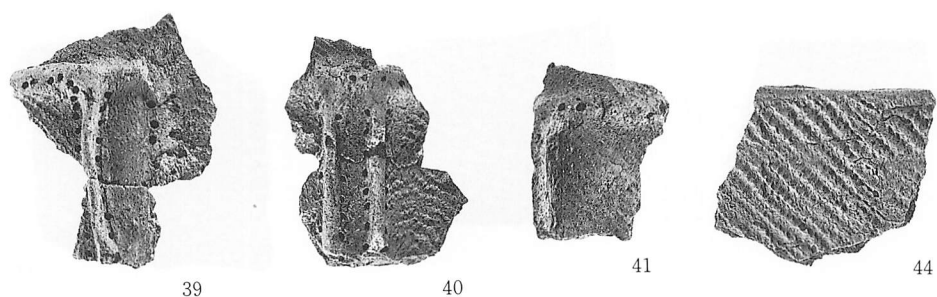


19

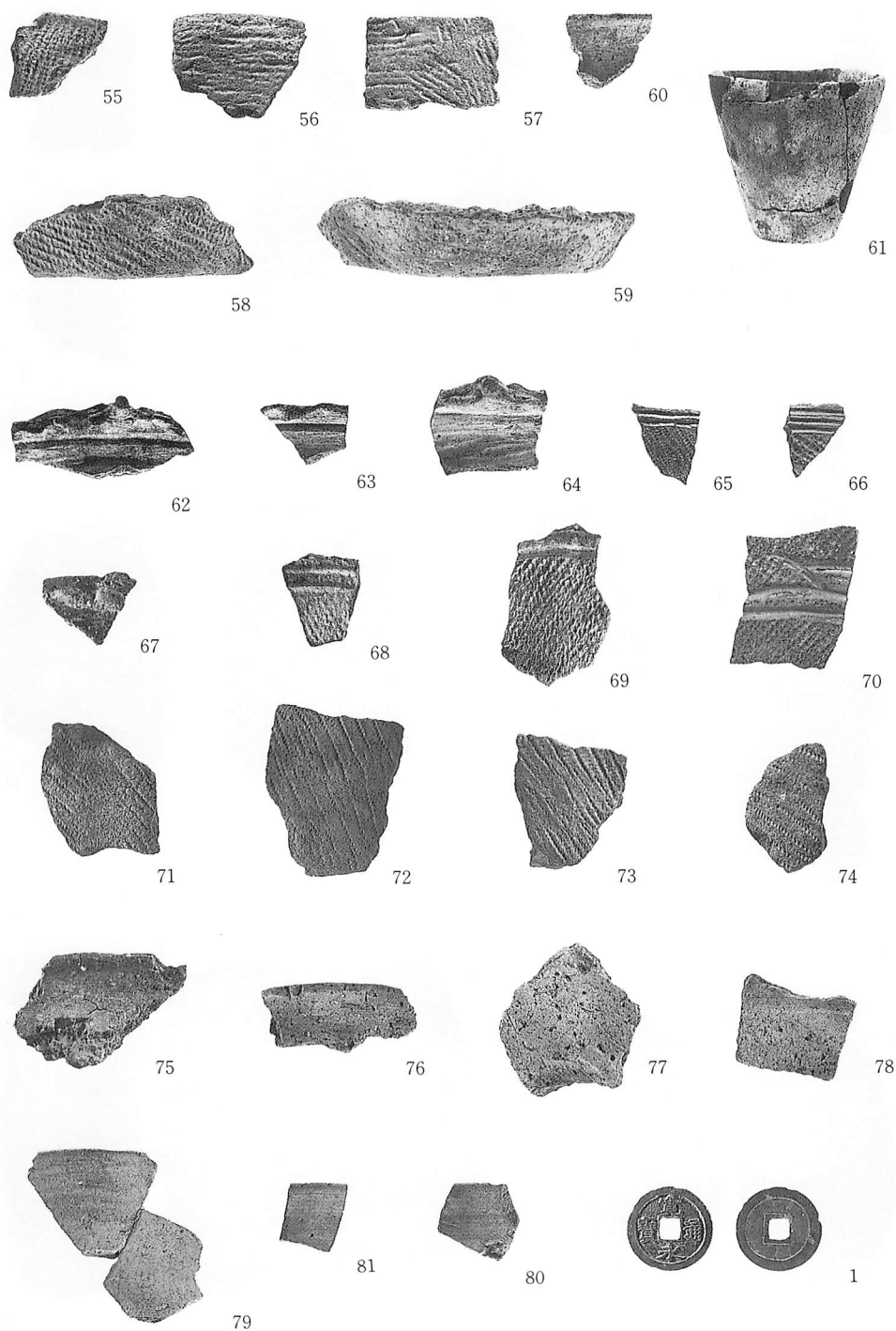
写真図版 4 土器(1)



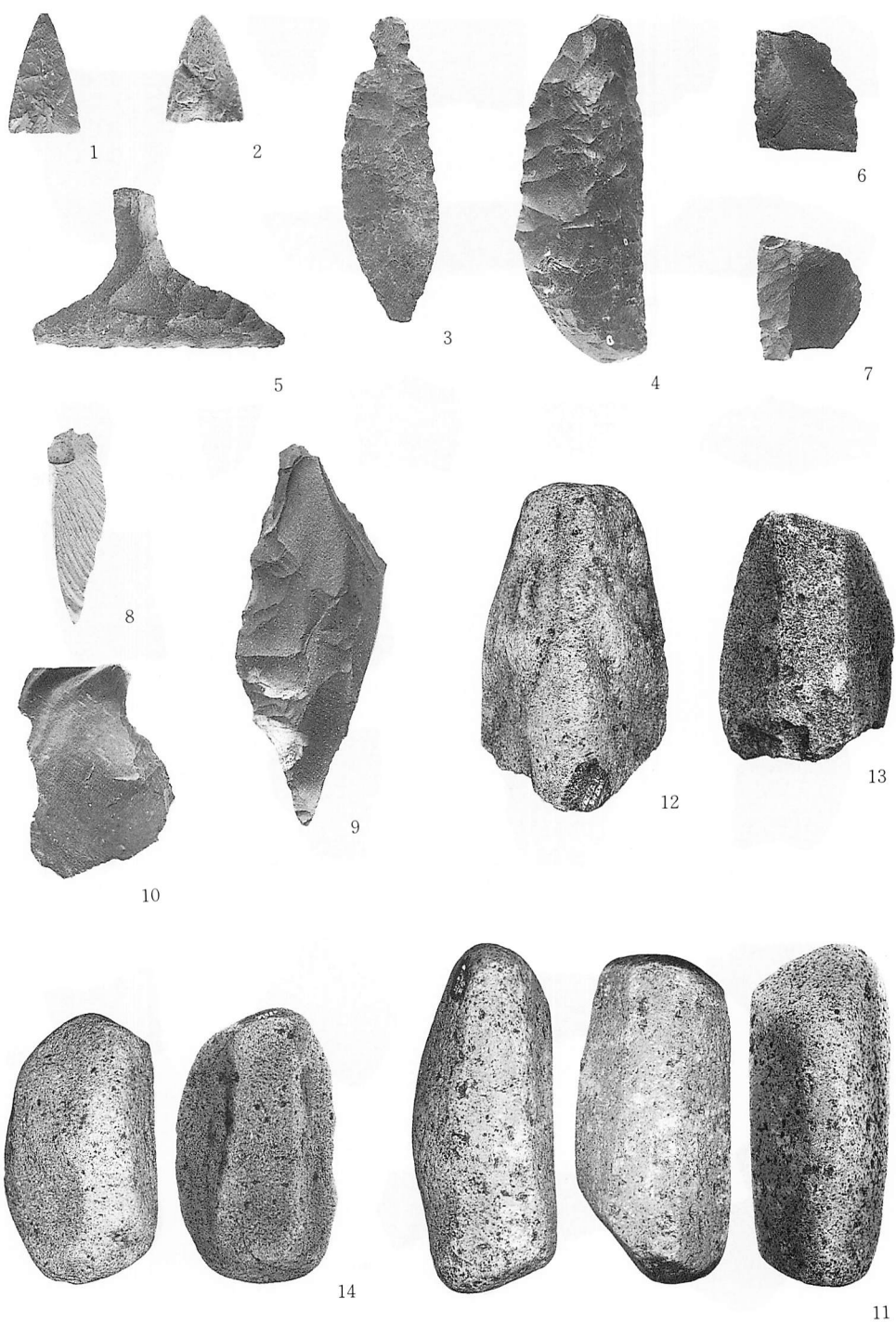
写真图版 5 土器(2)



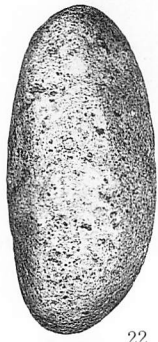
写真図版 6 土器 (3)



写真図版 7 土器(4)・古銭



写真図版 8 石器 (1)



22



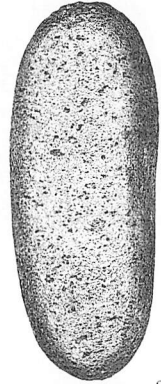
19



17



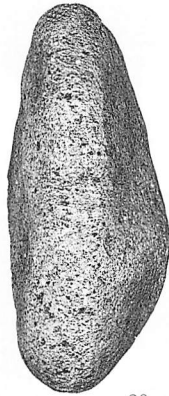
18



23



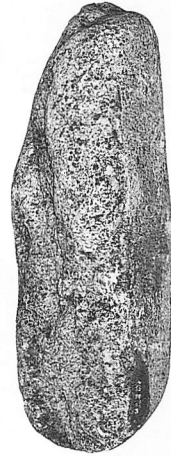
21



20



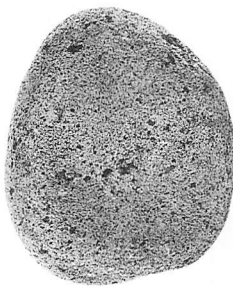
15



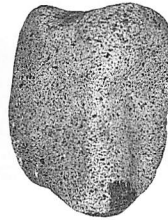
16



24

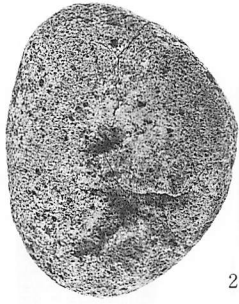


25

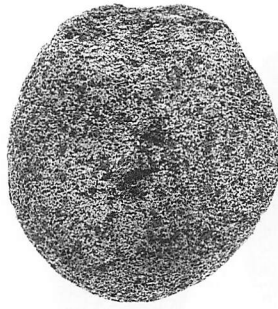


26

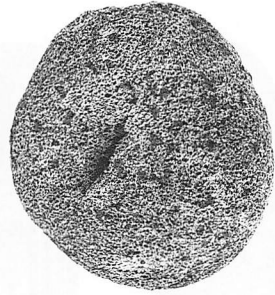
写真図版 9 石器(2)



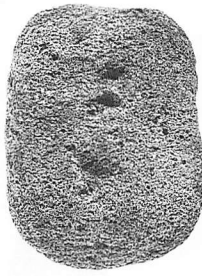
27



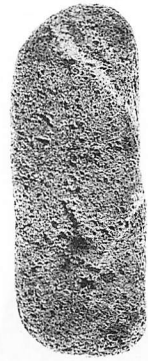
28



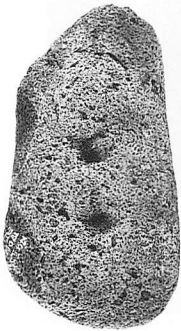
29



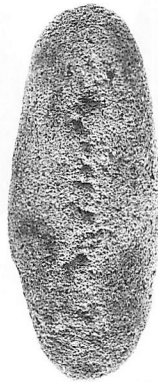
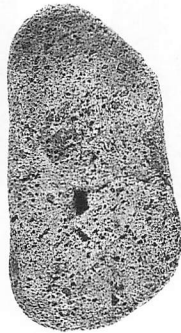
30



33



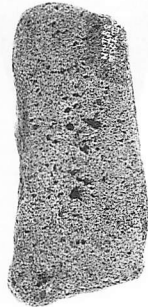
31



32



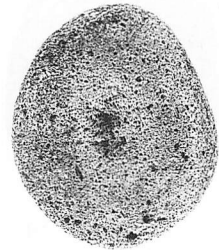
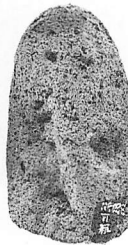
34



36

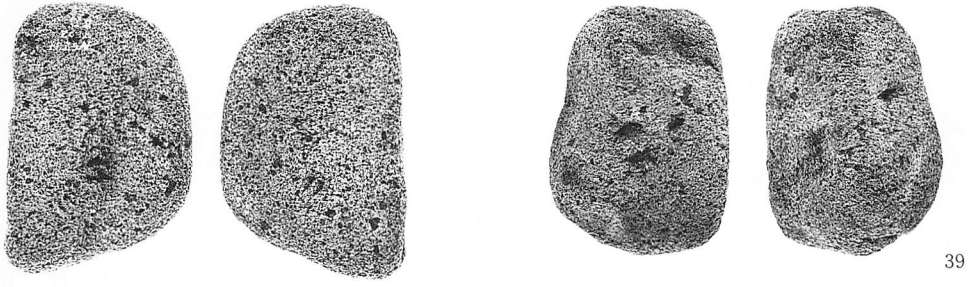


35



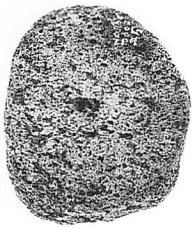
37

写真図版10 石器(3)

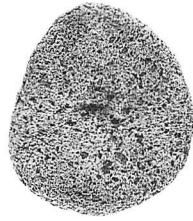


38

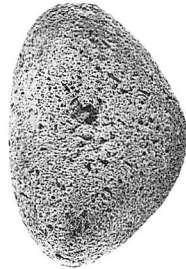
39



40



41



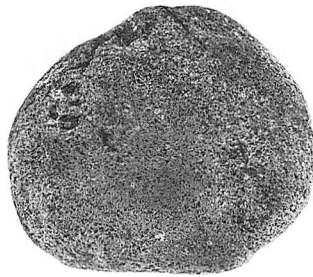
42



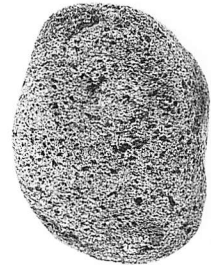
43



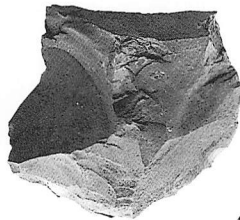
44



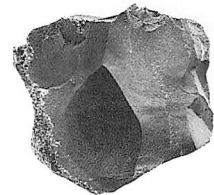
46



45



47



48

写真図版11 石器(4)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

管理課長(兼) 鎌 田 良 悦

課 長 補 佐 伊 藤 吉 郎

主 事 阿 部 隆 広

嘱 託

吉 田 一 男

運 転 技 能 師 員
兼

佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

調 査 課 長 昆 野 靖

課 長 補 佐 佐 々 木 嘉 直

主 任 文 化 財 員
専 門 調 査 員

文 化 財 員
専 門 調 査 員

遠 藤 修

〃 三 浦 謙 一

〃

斎 藤 邦 雄

〃 工 藤 利 幸

〃

高 橋 義 介

〃 高 橋 与 右 門

〃

佐 々 木 信 一

〃 平 井 進

〃

小 原 眞 一

〃 中 村 良 一

〃

村 上 修

〃 中 川 重 紀

〃

酒 井 宗 孝

文 化 財 員
専 門 調 査 員

期 限 調 査 付 員

菊 地 達 哉

〃 斎 藤 實

〃

相 原 伸 裕

〃 光 井 文 行

〃

及 川 靖 世

〃 佐 瀬 隆

〃

女 鹿 文 雄

〃 斎 藤 博 司

〃

濱 田 宏

〃 東 海 林 隆 幹

〃

及 川 涉

〃 佐 々 木 弘

〃

星 雅 之

〃 川 村 均

〃

森 下 宏

〃 鈴 木 貞 行

〃

高 橋 堅

〔資 料 課〕

資 料 課 長 高 橋 薫

主 任 文 化 財 員
専 門 調 査 員

田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第144集

野口Ⅱ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年7月25日

発行 平成元年7月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 三陽印刷株式会社

〒020 盛岡市肴町13番28号

電話 (0196) 51-1321・1322